

Tokyo College of Music Journal

Tokyo College of Music

January 2016
No. 43

東京音大ジャーナル43号
<http://www.tokyo-ondai.ac.jp/>



〈特集1〉 Special Interview 理事長×学長	2
〈特集2〉 作曲「芸術音楽コース」	6
〈特集3〉 オーケストラ	10
〈特集4〉 東京音楽大学ならではの教員養成プログラム	14
〈特集5〉 作曲「映画・放送音楽コース」/ 作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」/ 作曲「ソングライティングコース」	20
バイエルン州立青少年オーケストラ	24
〈シリーズ〉 東京音楽大学から世界へ	26
声楽「歌」が好きならどんな未来へも羽ばたける	28
合唱 プロのオーケストラとの共演	33
羽田プロジェクト	34
教員からのメッセージ	36
2016年度 企業内定者インタビュー	37
挑戦する在校生・卒業生	38
卒業生インタビュー	42
東京音楽大学付属高等学校	44
Tokyo College of Music Journal NEWS	46

第70回ジュネーブ国際音楽コンクール 作曲部門で優勝した、
数田 翔一さん(2009年大学卒業、2011年大学院修了)
写真提供:共同通信社

Journal
January 2016 No.43

東京音大ジャーナル43号

発行日:平成28年1月1日 発行所:東京音楽大学 広報課
〒171-8540 東京都豊島区南池袋1-14-5

TEL:03-3982-2717 FAX:03-3982-3317
<http://www.tokyo-ondai.ac.jp/>



Concerts 2016

東京音楽大学主催演奏会(予定)

卒業演奏会

4月23日(土) 18:00 東京文化会館小ホール

特別演奏会 ～コハーン・イシュトヴァーン クラリネットリサイタル～

5月21日(土) 16:00 東京音楽大学100周年記念ホール

シンフォニック ウインド アンサンブル定期演奏会

7月14日(木) 18:30 東京芸術劇場コンサートホール 指揮: 広上 淳一

ソロ・室内楽定期演奏会

7月17日(日) 13:00 東京音楽大学100周年記念ホール

ピアノ演奏会 ～ピアノ演奏家コース成績優秀者による～

7月26日(火) 13:00 東京文化会館小ホール

ピアノ教員によるコンサート ～ローナン・オホラ ピアノリサイタル～

9月10日(土) 16:00 東京音楽大学100周年記念ホール

声楽教員によるコンサート

9月24日(土) 16:00 東京音楽大学100周年記念ホール

弦楽アンサンブル演奏会

10月22日(土) 17:00 東京音楽大学100周年記念ホール 指揮・指導: 荒井 英治

シンフォニーオーケストラ定期演奏会

12月6日(火) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール 指揮: 秋山 和慶

【お問い合わせ】 東京音楽大学 演奏課 03-3982-2496

2017年4月開設

ミュージック・リベラルアーツ専攻

— 音楽、教養、英語を学ぶ —

詳しくはホームページ

<http://www.tokyo-ondai.ac.jp/>

2016年度東京音楽大学講習会日程

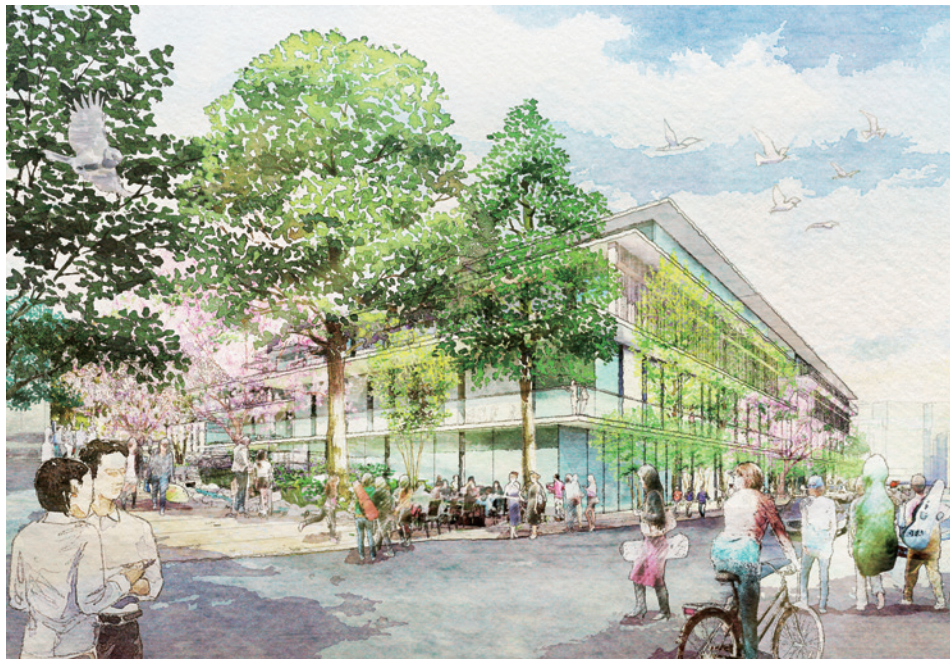
夏期受験講習会

7月26日(火)～7月30日(土)

冬期受験講習会

12月23日(金・祝)～12月27日(火)

【お問い合わせ】 東京音楽大学 教務二課 03-3982-3221



的な感覚の人々と学生たちが、つながりを持ち、何か行動を起こし、いろいろな文化が自然発生することに期待しています。

理事長 中目黒・代官山には、商業音楽を主とした、先鋭的な音楽文化があります。それらが、クラシック音楽を学ぶ者にとっても大きな刺激になり、クラシック音楽が大胆に進化する可能性もあるのではないかと思います。そうし

「進化」し続ける 東京音楽大学



鈴木勝利理事長 東京音楽大学は、2013年に6つの使命・目的を定めています。そして本年、それらを達成させるための、中期目標・中期計画を策定しました。これは、大学全体で改革を図り、次のステージへステップアップするための具体的な指標であり、新しい時代の東京音楽大学の実現に向けた挑戦のスタートとなります。具体的なプロジェクトとしては、「ミュージック・リベラルアーツ専攻の新設」「実践的教育制度の確立」「インターネットを活用した、世界とつながる授業展開」「高大一貫教育の推進」「飛び入学制度」および「早期卒業制度」の採用などが挙げられ、その一部はすでにスタートしています。そして、新たな東京音楽大学の活動拠点として、2019年4月より、中目黒・代官山エリアに「新キャンパス」をオープンする予定です。

新キャンパスの意味と期待

理事長 現在のキャンパスがある池袋は、場所的に芸術との親和性が高く、若者や外国人が集まりやすい街です。新キャンパスが設置される、中目黒・代官山エリアでは、そうした要素に加えて、さらに知的階層も集まる街という点で、文化的

た意味でも、そこは、さらなる文化的な発展性を秘めた街だともいえるのではないのでしょうか。

もともと都心にある大学が、さらに別の教育環境を求めて、都心内でキャンパスを移すというのは例がないと思います。それは冒険でもあります。日本の新たな音楽文化創造のための挑戦だと思っています。

学長 たとえば、ニューヨークのマンハッタンには、メトロポリタン歌劇場やエイヴリー・フィッツシャー・ホールを擁するリンカーン・センターやカーネギー・ホールから、ミュージカルのブロードウェイ、さらには各種のアンダーグラウンド芸術の施設まであり、あらゆる種類の音楽芸術・文化がひしめき合い、お互いに刺激し合っています。ひとくちにクラシック音楽と言っても、それはいろいろな要素で構築されているものです。ですから、その表現形態の多様性は歓迎されるべきなんです。本学の学生にとっても、今、そしてこれからのクラシック音楽がどう進んでいくべきか、あらためて考える、格好のチャンスにもなるでしょう。

2017年4月開設、「ミュージック・リベラルアーツ専攻」

学長 本学では、2017年度より「ミュージック・リベラルアーツ専攻」を新設する予定です。それは、音楽と国際的な教養を学ぶことにより、グローバル時代に対応する人材を音楽大学から輩出することを目指すもので、本学ならではの、他に先駆けた、先進的な専攻だといえるでしょう。授業は英語を中心に進められ、



理事長 鈴木 勝利
Katsutoshi Suzuki

有用性をもつ地域だといえるでしょう。そこでは、デジタルメディア技術を活用し、よりグローバルに活動できる環境を整備していく予定です。世界の音楽情報をインターネットで入手し、自らも世界へ発信していくこともでき、世界とリアルタイムでコミュニケーションがとれるわけです。新キャンパスは、その地域性、施設面で、これまで以上に、優れた音楽教育と、それを学びやすい環境を提供できると確信しています。

野島稔学長 私は、中目黒・代官山が移転先の候補としてあがった段階から、その地域・住民の文化に貢献することを強く願ってきました。地元の受け入れ意識も高く、理想的ですし、そこで学ぶ学生たちの意識や行動は、それに刺激を受けて、格段にレベルアップするでしょう。

また、本学は、これまでも海外の有数の音楽大学と提携し、音楽を通じて文化交流を図ってきました。新キャンパスの周辺は大使館や領事館が多く、国際性豊かな地域です。それらとの交流を含め、国際的な人材を育て上げる意味でも、新キャンパスがオープンするエリアには大いに期待でき、学生たちのキャリア支援にも大きな弾みになると思います。国際



学長 野島 稔
Minoru Nojima

英語で学ぶことにより、日本語の表現の特徴も同時に体感できると思います。

日本人は、物事をはっきり言うことを好まず、曖昧に相手に伝えます。一方、外国人はすべて直接的に表現します。彼らは自分を主張しなければなりません。すべて言葉ではっきり伝えなければ、曖昧な表現は理解されず、誤解を招きます。英語で学ぶことにより、日本語の言葉の大切さを実感できるでしょう。また、この専攻では、1年次、2年次と学んでいくうちに、自分の進路を絞りこみ、その目的に向かって邁進できるように、カリキュラムを変更していくことができるシステムも考えています。

また、音楽大学における教養科目の役割と位置づけに関しても、これから考えていかなければいけないと思っています。

理事長 以前、学長がある演奏を聴いて、「上手で完璧、速くて正確だが、何か足りない。音楽大学というのは、その『何か』を求めるところだと一所懸命に考えている」と話されました。単に譜面どおり正確に、一つの音も間違えずに弾く。それだけでは人に訴えかける音楽にはならない。「何か」を、学生がどうやって身につけるか。教員たちがそのためにいかに教



えていくか。その先鞭をつけるのが、東京音楽大学のミュージック・リベラルアーツ専攻だと位置づけています。
学長 どんな楽器でも、「音」には、その演奏者のすべてが正直に表れるものです。単に、「きれいな音」とか「乱暴な音」ということではありません。音楽は、その内容が深くなれば深くなるほど、人間の中にある、さまざまな感性や知性のよう

なもの、より高いレベルで融合して生まれるものなのです。そのためには、演奏実技の教員と、教養科目の教員の歩み寄りが不可欠でしょう。実技の教員は、学生が教養科目の重要性を感じるようなレッスンをしなければいけません。また、教養科目の先生は、実技のレッスンに、知性と教養を学ぶ要素があることを学生たちに知らしめ、理解させなければいけないと思います。演奏技術だけではなくて、人間としての魅力を向上させることにより、より高度な音楽が生まれます。それは結果的に、一人ひとりの学生の「人間教育」にもつながることでしょう。

理事長 実技レッスンと教養、知識の修得が歩み寄る。お互いに「100」だと主張しているのは、真の教育にはならない。学長のお話は、音楽大学における教育の根幹だと思います。歩み寄りには、ときには主張し合うことも大切ですし、譲歩するときは譲歩し、そして融和する。それぞれが歩み寄って、調和のとれた音楽教育を実践するための、有効的、具体的な施策を目標として定め、構築していくことが大事だと思います。

実践的な教育制度の確立

理事長 本学はこれまでもも学生の目的に応じた、独自の実践的な教育を確立してきました。たとえば、オーケストラでの演奏を学びたい学生のために、ドイツ・バイエルン州主催のバイエルン州立青少年オーケストラと提携。毎年30名以上の学生が夏・冬2週間ずつ、ドイツ、北イタリアでバイエルン放送交響楽団のメン

試験はともかく、少なくとも講義は、学生が学びたい時間にどこでも学ぶことができれば、授業を効率的に行えます。また、世界中の学生を本学に惹きつけることもできるでしょう。もちろん、レッスンでは、教員と1対1で指導を受けながら、生の音を聴き、目で見て、自分で音楽的な向上を図っていく、「Face to Face」が大切です。この二つのメリハリをつけた授業構成が、これからの音楽大学には必要だと思っています。

理事長 個々の学生のニーズや環境に合わせていくという観点では、海外での演奏活動を目指して、少しでも早く海外へいきたいという学生のために、インターネットを利用して海外で学びながら単位を取得していくようなシステムも、将来は考える必要があるかもしれません。

実技面では海外の音楽大学へ入学してレッスンを受け、学科はインターネットを利用して本学の授業・試験を受けるというケースも出てくるかもしれません。「Face to Face」と「インターネット」をいかに組み合わせたいか、現在研究しているところですが、具体的なプログラムはできていませんが、新キャンパスの展開に伴って、具体化することができればいいと思っています。まずは挑戦、進取の気概のある東京音楽大学だからこそできる取り組みでしょう。

高大一貫教育の推進、飛び級制度の確立

学長 「高大一貫教育」もとても重要、有意義なことだと思っています。高校から大学、大学院、さらに博士課程まで進めば、

現役の一流演奏家の教員に囲まれながら、計11年間以上も学ぶことができます。特に、高校の3年間で、大学生と同じ環境で音楽を学ぶ機会をもてることは、非常に有意義でしょう。その年頃の音楽的な成長のスピード、変化にはめざましいものがありますので、大学の4年間よりも大きな意味をもつかもしれません。また、高校から大学へと、その間がスムーズにつながっていることも音楽教育にとって、もっとも理想的なスタイルだと思います。中目黒・代官山の新キャンパスのオープンに伴い、高校のキャンパスも、護国寺から現在大学がある池袋に移転します。そこでは大学の授業も行われており、付属高校生は、今以上に大学生と一緒に授業を受けられ、また、その演奏を間近で聴けることにもなります。大学と付属高校の交流が、より一層活発になるでしょう。

理事長 「すでに音楽の技術的にも、人間形成の面、つまり教養系の科目の習得でも、あるレベルに達した学生・生徒を、大学に4年間、あるいは高校に3年間、義務的に通わすことに果たして意味があるのか?」「早く次のステップとして、演奏家、教育者、企業人として、少しでも早くから活躍できるようにした方が、その学生・生徒のためにも、社会のためにも有益ではないか?」、そういった発想で本学では大学への「飛び入学制度」の採用を検討しており、「早期卒業制度」はすでに実施しています。

また、これからは、幼児教育においても新展開を図りたいと思っています。音楽教室を中目黒・代官山地区で積極的に展開して、幼稚園児から小中学生までを

バーが主たる指導陣となった、合宿と演奏旅行に参加しています(※P.24参照)。

「教職課程管弦楽・吹奏楽」の授業では、学生は自分の専門外の楽器を選んで演奏します。それは、教師となって、初心者に教えるときのために、相手の苦勞を、事前に身をもって体験するという、指導者になるための有効な機会になっているでしょう(※P.18参照)。加えて本学は、明星大学通信教育部と教育業務提携を締結し、これまでの「中学・高校1種免許状」取得に加えて、同時に「小学校教諭2種免許状」も取得できるようになりました。

「文化力発信プロジェクト」は、演奏会や小中学生向けの音楽教室、楽器の作り方教室など、文化的な事業を、学生が自分たちで企画、交渉、実現するというもの。これも他の大学にはないプログラムです。

その他、キャリア支援では一般企業への就職を目指す学生の支援活動、英語教育を行うイングリッシュスタディセンター、などもあります。また、アイヌ、沖縄、ガムラン、アジアの民族音楽を研究している付属民族音楽研究所もあり、単に音楽技術だけを学ぶのではなく、学生の積極的な意思があれば、音楽をより総合的、複合的に学ぶことが可能なのが、本学最大の特徴だと思いますし、これからさらに進化させていくつもりです。

学長 現在、座学の授業は、学生が先生の講義を教室で聴いて、試験を受けて単位をもらうという形式になっていますが、これからは、インターネットを最大限に活用し、世界中のどこでも講義が受けられるようになればいいと思っています。

対象とした音楽教育を推進する。しかも、クラシック音楽の基礎を固める教室として、幼児の頃から専門的な教育をしていくことを考えています。

多様な音楽的価値観を醸成

理事長 音楽は人類が最初に手にしたコミュニケーション行為であり、自分と他人をコントロールする手段だったと思います。現在、言葉はいろいろな民族や国に分かれ、単純には通じなくなりました。しかし、人類が最初に手にしたコミュニケーション行動である音楽は、国や地域の違いによって多少の違いこそありますが、基本的には互に通じ、理解し合えるものではないでしょうか。音楽のもっている多様性とは、そこにあるのではないのでしょうか。今、東京音楽大学は、さらなる進化を遂げようとしています。新キャンパスを活動拠点の一つとして、各種の新しい教育カリキュラムや制度を享受しながら、音楽の多様性を学び、そこで得た財産を広く世界に発信していったらいいと、強く願っています。



「作曲への挑戦」 その魅力とは……



西村 朗
「蓮華化生=Padma incarnation」
全音楽譜出版社、©1998

西村 朗 教授 Akiro Nishimura



「作曲」とは、作品を書き上げる以前に、まず、「音やその響きと人間」「自己との関係」について、自問自答し、探求する芸術です。自己の未知なるゾーンに向かい音を投げかけ、そこから跳ね返ってくる響きに耳を傾けながら人生の新たな光や道を見いだし、そして「作曲」という大きな目標に向かって進んでいく。それは、

「自らの本質を追究する芸術」「自己啓発」といえるでしょう。そこには大きな発見と驚き、そして喜びがあるはず。本コースではそうした一連の流れが、歴史的にどのような道を歩んできたのか、特に20世紀後半の音楽から体系的に学び、自らが進むべき道を学生自身に見つけ出してもらいます。進むべき道が見つかれば、あとはどうやって飛び立つかだけです。試行錯誤の連続かもしれませんが、21世紀に生きる皆さんには、新たな自分の道、可能性を発見してほしいと思います。

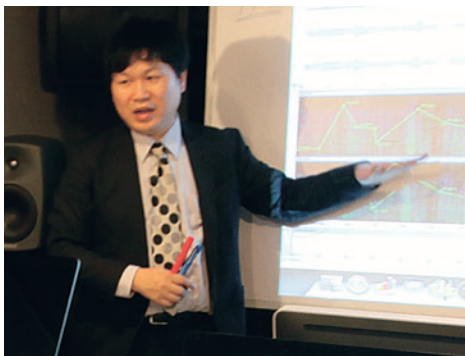
日本には、多くのすばらしいオーケストラが活動しています。自分の作品を100人ものプロフェッショナルな音楽家たちが、彼らの魂のこもった「音」にしてくれることはとても贅沢であり、それを導き出すのは作曲家の大きな喜びです。学生たちが、仲間たちとともに、その喜びを共有できる本コースでは、私たち教員も創作する喜びを享受し、その苦しみに日々立ち向かっています。皆さんも、その姿を見ながら、自分たちの新たな可能性に向かって積極的に挑戦し、クラシック音楽の未来を切り拓いてほしいと願っています。

伝統的な作曲技法とコンピュータ技術の融合で最先端の作曲を学ぶ

Tomiko Kojima
糞場 富美子 教授
Yutaka Fujimura
藤原 豊 教授



Takeshi Tsuchiya
土屋 雄 准教授



作曲「芸術音楽コース」では、コンピュータを活用した音楽の研究である「先端アートII 電子音響音楽等、最先端技術を用いた芸術」を学ぶことができます。これは本学ならではの、特徴的なカリキュラムで、三つの柱を設けて授業を展開しています。

一つ目は「作曲支援」です。作曲における曲のフォルム、音価、音程構造など、作曲をするために必要なパラメータをコンピュータによって決定し、器楽作品に投影させるプロセスを学ぶもので、

二つ目は「音響デザイン」。音の合成や加工など、音楽や音響をミクロレベルでとらえ、発せられる音の中の細かい部分を分析することにより、新たな音楽を作り出していきます。

三つ目は「リアルタイムインタラクティブ」。コンピュータと人間のコラボレーションによる演奏表現の可能性を追求するもので、本学では実習を伴った授業が展開されています。

これらの分野だけに特化した専攻をもつ大学はいくつかありますが、本学では、それを作曲「芸術音楽コース」の中にもっていることが最大の特長です。単に技術だけを学ぶのではなく、伝統的な作曲技法などを学びつつ、同時に最先端アートを学ぶところに、非常に意味があると思います。



北爪 道夫 客員教授
Michio Kitazume



新実 徳英 客員教授
Tokuhide Niimi



細川 俊夫 客員教授
Toshio Hosokawa



池辺 晋一郎 客員教授
Shinichiro Ikebe

「芸術音楽コース」の特色の一つは、学生が自分の目指す作風の変化に応じて、毎年自由に指導者を変更できることです。そのため、在学中、複数の指導者から、それぞれ異なる視点でのアドバイスを受けることが可能となり、学生の作品は、幅広く、豊かな色彩を放つようにもなります。加えて、商業音楽を学ぶ「映画・放送音楽コース」との垣根もなく、お互いにそれぞれ、自発的に触発・吸収し合っています。自分が本当にやりたい音楽を見つけ出し、それを自由な発想から創作できる、アカデミズムに縛られないことのない環境で、作曲に臨むことができるのです。

本コースでは「作曲理論」として、1・2年次には管弦楽法の基礎と演習、3年次にはコンピュータ音楽と吹奏楽法の2講座、4年次では総合的な作曲演習という、少人数によるカリキュラムを設定しています。学生は多様な作曲技法を学ぶことによって、気鋭で自由な編成を選択することや、社会から求められる分野での創作が可能になり、オーケストラの編成にマルチメディアの技術を取り入れる機会も手に入れることになります。学生が希望する指導者から、クラシック音楽の基本的な作曲法と現代の最先端音楽へのアプローチを実践的に学べるのが、本コースの魅力です。作曲家を目指す方々には、その環境を積極的に生かし、新たな時代の音楽芸術を創造していただきたいと思っています。



Profile
2008年東京音楽大学大学院作曲科修了。ローム ミュージックファンデーション奨学金、文化庁新進芸術家海外研修制度、デンハーグ王立音楽院より助成を受け、アムステルダム音楽院およびデンハーグ王立音楽院を修了(2009-2014)、インドネシア政府奨学金および野村財団より助成を受け、インドネシア国立芸術大学スラカルタ校でジャワ・ガムランの演奏と理論を学ぶ(2014-2015)。これまでに作曲を池辺晋一郎、伊左治直、遠藤雅夫、佐藤真、藤原豊、福田陽、細川俊夫、Wim Henderickx、Martijn Padding、Yannis Kyria kides各氏に師事。オーケストラ作品『ケサランパサラン』で第17回芥川作曲賞受賞(2007)。その後、第76回日本音楽コンクール作曲部門第2位と聴衆賞、第18回出光音楽賞、アリオン賞等を受賞。

作曲を学ぶための豊富な経験を修得する

Noriko Koide
小出 稚子

2006年大学卒業、2008年大学院修了

友達作りのため、4歳からヤマハ音楽教室に通い始めたのが、作曲を学ぶスタートでした。その後、高校時代に作曲の個人レッスンを受け始め、音楽大学で作曲を専攻する道を決めました。東京音楽大学への進学を希望したのは、私が憧れていた先生が多くいらしたからです。現役の作曲家として活躍されていた先生に「ぜひ自分も教わりたい」と願ったことを、今もよく覚えています。

「いろいろな先生方から自由に学べる」ことも、私にはとても魅力的でした。実際に入学すると、学生たちは実在のびのびと、かつ積極的に作曲していました。

東京音楽大学のもう一つの大きな特徴は、「教職課程管弦楽・吹奏楽」の授業をはじめ、邦楽やガムラン(インドネシアの民族音楽)のコースまであり、多種多様な楽器を学べることです。自分が研究したい楽器を楽器室から借りることもでき、作曲する上で不可欠な、経験と知識を得ることができま

自らの意思で求める指導者

Shoichi Yabuta
藪田 翔一

2009年大学卒業、2011年大学院修了

いわゆる「小室ブーム」が引き金となり、私が作曲のまねごとを始めたのは、小学6年の頃です。その後も意欲は継続し、東京音楽大学の作曲「芸術音楽コース」へ入学しました。

本コースの特色は、著名な作曲家の先生方が多く、また、学生自らの希望により、毎年自由に希望した指導者に習えることです。私の場合は、1年次で藤原豊先生が未熟な私のやる気を起こし、2年次の榎場富美子先生は、私



Profile

2011年東京音楽大学大学院作曲科修了。これまでに作曲を有馬礼子、西村朗、榎場富美子、藤原豊、飯塚邦彦の各氏に師事。第70回ジュネーブ国際音楽コンクール作曲部門グランプリ、ウィーンコンチエルトハウス100周年作曲賞最優秀作品賞(オーケストラ部門)。2013年SORODHA国際作曲コンクール1位入賞(ベルギー)、2013年カジミエシュ・セロツキ国際作曲コンクール3位入賞(ポーランド)。2014年第3回クアアア国際作曲賞NEW NOTE2位入賞。第78、79、80、81回日本音楽コンクール4年連続2位入賞。トロンボーンピース・オブ・ザ・イヤー2011作曲賞。京都フランスアカデミーメシアン賞。2014年第3回高松国際ピアノコンクール課題曲委嘱作曲家。2014年龍野アートプロジェクト舞台監修。たつの市民奨励賞(文化賞)。21世紀音楽の会員。

東京音楽大学は「出会いの場」

■ 西下 航平 Kohai Nishishita
2015年大学卒業 大学院1年

3歳のときからリトミックやエレクトーンを習い始めました。その後、小学1年から作曲も始めましたが、高校時代に在籍していた合唱部に、作曲する先輩がいて刺激を受け、おもに合唱曲を作曲するようになりました。東京音楽大学への進学を希望したのは、合唱曲を書く作曲家として知っていた池辺晋一郎先生や西村朗先生に学びたかったから

です。作曲「芸術音楽コース」で実際に出会った先生方は、一人のアーティストとして学生に接し、アドヴァイスしてくださいます。その結果、私たちは、再度、自由な発想と視点から作曲を考え直すことができるのです。本学では器楽専攻の方たちから、作・編曲をよく依頼されます。また、彼らも私たちがからのリクエストに応え、積極的に協力してく

れるんです。演奏者に奏でられてこそ曲は成立しますので、こうした出会いも貴重だと思います。東京音楽大学は「出会いの場」です。私も入学して初めて、琵琶やガムランの世界を知り、入学することだけで満足せず、積極的に出会いを求めていたのだと思います。

自分自身に問い 追求める 自分の音楽を

■ 宇澤 とも子 Tomoko Uzuwa
2015年大学卒業 大学院1年

大学3年のとき、西村朗先生から「君にとって音楽とは何か?」と問われました。作曲「芸術音楽コース」では、現役で作曲活動をされている先生方の背中を見て、「自分はどうしたいのか」と自らに問いかけることを常に学びます。また堅固な音楽観で作曲に励む仲間たちから、大いなる刺激を受けます。コンピュータを駆使した作曲も許され、評価

してもらえる「自由」もあります。そうした環境だからこそ、自分の求める音楽をじっくりと追求することができます。それは本コースの大きな特徴だと思います。私は今、「人間の根源にかかわる『音楽』や『踊り』の融合を追求したい」と思っています。2015年、日独アーティストによる「SOMAプロジェクト」に参加しました。

「SOMA」とは、ギリシャ語で「身体」を意味します。演出家が提示する「テーマ」に基づき、私たち音楽家とダンサーで100以上の表現素材を作り、構成しました。その舞台作品は日独両公演ともに高く評価され、今までにないほどにやりがいを感じました。こうした創作活動への挑戦も、本コースならではの環境にいたからだと感じています。

国際化と海外との交流 DAAD*との日本初国際プロジェクト

*Der Deutsche Akademische Austauschdienst (ドイツ学術交流会)の略称で、ドイツ連邦共和国の大学が共同で設置している機関。大学間における国際交流を促進する役割を担っており、国内外の研究者、大学教員、学生を対象にした多様なプログラムやプロジェクトを実施しています。



原田 敬子 准教授

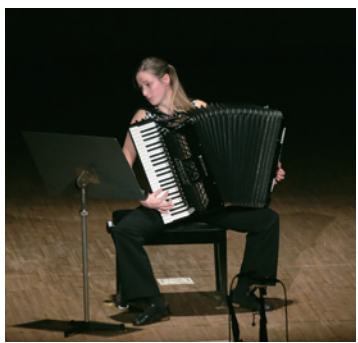
Keiko Harada

本学作曲専攻10名の作品が、ヴェルツブルク音楽大学アコーディオン科の学生により、日本とドイツで初演されました。アコーディオンが誕生して約150年、新しい楽器です。ピアノやヴァイオリンなど、ほかの楽器に比べ、オリジナル曲がとて少ないという現実があります。

そうした状況下、世界でもっとも入学が難しいともいわれ、DAADの構成メンバーの1校でもある、ドイツのヴェルツブルク音楽大学アコーディオン科は、新しい曲を求めて、5年ほど前から海外の音楽教育機関とのコラボレーションを図ってきました。その一環として、東京音楽大学の作曲専攻にオファーがあり、本学作曲専攻の学生と、ヴェルツブルク音楽大学アコーディオン科の学生による、日本の共同作業がスタートしたのです。実際の演奏の仕上げには、インターネット時代らしくSkypeを活用。曲の断片を書い

ては演奏者に渡し、フレーズのイメージを伝えています。ニュアンスを確認する作業が続きました。本学の学生たちにとって不慣れた、アコーディオンならではのデリケートな音色を、作曲家と演奏者がお互いにリアルタイムでコミュニケーションを図り、微調整を続けながら、一緒に曲を完成させていくのです。

「創造」とは作曲のみの行為ではなく、演奏者とともに刺激し合ってこそ達成されます。この日本の音楽大学で初めての挑戦は、ドイツの若き演奏家の満ちあふれるエネルギーと、本学学生の積極的な創造意欲の融合により、しつかり達成できたと思



世界初演奏会 2015年1月12日 東京音楽大学100周年記念ホール

ドイツの学生と共同でアコーディオンの作曲に初挑戦

INTERVIEW ■ 小濱響子 Kyoko Ohnami 大学4年

今回のプロジェクトでは、作曲の段階からヴェルツブルク音楽大学の学生と本学の学生とで1対1(あるいは1対2)のチームを組み、共同で作業しました。曲を仕上げる過程でSkypeを活用したため、ドイツにいるパートナーの演奏をリアルタイムで聴き、奏法や表現についてお互いに提案し合うことができました。細かな曲想を英語で伝

Skypeによる共同創作



初めて作曲するアコーディオンの演奏法も、Skypeを通じていろいろ学びました。

レコーディング



ヴェルツブルク大学 フッソング教授の指導による全曲レコーディング

東京音楽大学ならではの、 華麗なアンサンブル。 その、魅力とは？

4月から練習を重ねてきた、「オーケストラ」の授業。その集大成として、東京音楽大学シンフォニーオーケストラ定期演奏会が開催されました。表情豊かなクラリネットの音と、緻密であてやかなオーケストラのアンサンブルが、会場のお客さまを魅了しました。



2015年11月27日 東京芸術劇場コンサートホール 指揮 現田 茂夫 クラリネット コハーン・イシュトヴァーン
ベートーヴェン／序曲「レオノーレ」第3番 コーブランド／クラリネット協奏曲 ムソルグスキー(ラヴェル編曲)／組曲「展覧会の絵」
【アンコール曲】コハーン／ハンガリー幻想曲 第1番

指導教員・学生座談会

2015年10月20日

〈参加者〉水野 信行 教授／福田ひろみ(ヴァイオリン4年)・高山航太(トランペット4年)・永和田芽衣子(クラリネット4年)

アンサンブルの基礎は 少人数編成で学ぶ

定期演奏会に向けて、最終的な仕上げに取り組んでいる学生たちと、指導にあたられている水野信行教授に、本学のオーケストラの授業の魅力について語っていただきました。

水野先生 東京音楽大学のオーケストラの授業では、1年次の間は室内楽および分奏を学び、その後、弦楽器は2



年次から、管打楽器は3年次からオーケストラ編成での授業となりますが、少人数編成のアンサンブルの勉強は役立ちますか？

福田さん 分奏で、少人数でのアンサンブルを徹底的に勉強すれば、オーケストラという大人数になってもあまり戸惑うことがありませんので、とても役立っています。

水野先生 小さな室内楽が規模的に大きくなるのがオーケストラ。室内楽は基本であり、そこで理解できなければ、オーケストラでできるはずはありません。まずは基礎をしっかり固めるという意味で、少人数からのスタートにしています。

高山さん 室内楽の勉強がすごく役立つっていることは、私も感じています。大人数のオーケストラでも周囲の音を聴く力、アンサンブル力がついたと感じます。

永和田さん 室内楽では、ただ演奏を合わせるだけではなく、音色の部分まで考えないといけない。それができないとオーケストラでは通用しないことを知りました。

水野先生 アンサンブルでは、全体に調和した演奏でありながら、同時に、自分の音もアピールしなければなりません。

せん。そのため、オーケストラで通用するためには、本当に多くのことを学ぶ必要があります。発音、音程、音色や楽譜の読み方もそろえるなど、基礎的な部分を踏まえた上で、周囲の音を聴き、バランスも考えないといけない。それらに対応するためには、いろいろな方法を学んで「自分の引き出し」をたくさんもつことが大切です。

自分で考え、演奏する

水野先生 実際にオーケストラで合わせた印象は？

高山さん 初めてのオーケストラ経験なので、いろいろと勉強になります。楽器それぞれの音色や鳴らし方が違う。人数が多いため、ひとりで対応できることが限られ、オーケストラ全体で修正をしていく難しさを感じています。

福田さん 高校生のときにオーケストラを体験していますが、それは部活レベルの話。大学の授業では、個々の演奏者のレベルが高いので、ニュアンス



オーケストラは社会の縮図

水野先生 演奏が周囲と合っていないとき、皆さんも、何がしかのストレスや違和感を受けると思います。一方、演奏が合っているときは、本当にリラックスできる。

オーケストラは社会生活に共通する部分があると思います。まず個人がしっかりしていること。そしてそのしつかりした個人が集団で調和しつとも自分を主張し、集団がよりよい方向に進むような努力をする。集団の意見に流されるだけではないし、自己主張が強いばかりでもない。オーケストラを学ぶことで、社会人として大切な部分も勉強できるのではないかと思います。



Shigeo Genda

現田 茂夫 指揮

あふれる意欲で 自らを高めてほしい

パート別に演奏指導

私は、今の東京音楽大学の学生たちの演奏は、少し以前のプロオーケストラと遜色ないレベルにあると感じています。それは東京音楽大学ならではの、特徴的な指導による賜物でしょう。その一つが、指揮者以外に、それぞれのパートごとに専門の先生方がつき、演奏指導することだと思えます。演奏を各パート別に的確に修正できることは、オーケストラの演奏を作り上げていく上でとても有効的です。しかも、現役のオーケストラメンパーとして活躍されている先生方が多数ににあたるため、きわめて実践的に役立つ指導をしていただけます。オーケストラは多くの細胞の集合体。そこで演奏することは実に大変です。音程はもとより、曲への解釈などが一つになり、いかなる演奏空間でもお客さまに感動していただく音楽を創造する、それこそがアンサンブルでしょう。そのためには、演奏者は常に周囲の音・演奏をしっかりと聴き、そのつど対処しなければなりません。学生のとときから、実践的な指導により、「引き出し」を数多く用意できることは、とても有意義なことだと思います。

今回の私の使命は、演奏会に向けて楽

演奏の場が何よりも大切

団メンバー全員がクレッシェンドし、お客さまの琴線に触れる「いい音」をお届けできるよう、学生たちを導くことだと思えました。いい音とは、作曲家の頭の中にあつた理想の音、しかし、それは数百年前のものであり、各音符には当時の文化や作曲家の思考が隠されています。現代のわれわれが演奏する際には、それを推測するしかありません。たとえば、同じ音符でも作曲家によってそれぞれ意味合いが違います。

また、楽譜に「強く」「速く」というような演奏記号があっても、それが果たして「どれくらい強いのか、どれくらい速いのか」という絶対的な数値は表されていません。そうした、数学的、絶対的な正解がないところが、音楽の楽しさであり、難しさです。そのため、私は同じ作曲家が書いた違う曲の楽譜を読み込み、当時の時代背景を勉強して、学生に「ここはこういう解釈だと思おう」と提言し、学生たちがより深く曲を理解するための、手助けをしていくことが重要だと考えてきました。

幸い、東京音楽大学には、さまざまな演奏する機会があります。お客さまの前で演奏することが、何よりも演奏者の成長を促すもの。そうした成長するチャンスが多数あることも、東京音楽大学ならではの特徵でしょう。

ただし、真に成長できるか否かは本人次第です。だからこそ、これから東京音楽大学への入学を目指す方々には、自らを高める意識を強くもって入学してきていただきたいと思っています。あふれる意欲をもった方々にとっては、これほど成長できる環境はないと思います。

人生の師と出会った 東京音楽大学

Hiroshi Kitawa
木川 博史

NHK交響楽団ホルン奏者
ホルン 2007年大学卒業



ホルンに魅された幼少期

現在、私はNHK交響楽団でホルンを吹いています。ホルンを始めたきっかけは、兄が所属していた小学校のオーケストラのコンサートを見に行ったこと。ベートーヴェンの交響曲第五番『運命』が演奏されていて、その曲中のホルンがとても印象

Profile

第20回日本管打楽器コンクール ホルン部門1位及び大賞受賞。第39回マルクノイキルフエン国際コンクールにおいてディプロマを受賞。ソリストとして東京交響楽団、新日本フィル、神奈川フィル、日本センチュリー交響楽団等と共演する。これまでに、サイトウキネンフェスティバル、小澤征爾音楽塾、PMF等に参加。東京音楽大学付属高等学校、同大学を卒業。水野信行、富成裕一、岡本充代の各氏に師事。ベルリン芸術大学にてC.F.ダルマンに師事。2013年大阪市より「咲くやこの花賞」を受賞。日本センチュリー交響楽団を経て、2015年9月よりNHK交響楽団団員。

的だったんです。

トランペットを吹いていた兄のことなど忘れ、「ホルン、カッコいい!」と目を奪われてしまつて…。それ以来、音楽を聴くときには、自然とホルンの音に意識が集中するようになりました。小学4年のときに、兄が所属していたオーケストラでホルン担当になったのはとてもうれしかったです。

その後、地元の中学校でもオーケストラを続け、縁あって東京音楽大学付属高等学校へ進学することになりました。

毎日刺激的だった 付属高等学校時代

高校時代は先生にも仲間にも恵まれ、とにかく楽しく充実した日々でした。周囲には演奏が上手な人、音楽的才能に恵まれた人が多く、少しでもその人たちに追いつけるように必死に努力しました。皆、私よりも早い時期から楽器を習い始めていたから、とにかく食らいついていく感じだったと思います。また、管楽器専攻には大学生と一緒に受けられる授業があり、そこで身近な目標となる先輩に

出会えたのも大きかったです。自分よりも高いレベルにいる人、同級生や大学生…、本当に多くの人たちから刺激を受けました。

水野信行先生との出会い

大学に進学して、何よりも大きかったことは、水野信行先生と出会えたこと。先生がいなかったら、今の私はありません。先生が吹かれるのを初めて聴いたときの衝撃は、今でもはっきりと覚えています。音の響き、フレーズがもつ意味…、同じ音を吹いているのに、ほかの人とはまったく違う。先生の人間性や経験が音にこめられているのがはつきりと感じられ、とても私に出せる音ではありませんでした。

ほかにも先生からは、演奏に臨む姿勢や音楽家としての振る舞いなど、音楽的なことはもとより、人間としてもたくさんのご指導を学ばせていただきました。それらは、今の私にとってかけがえのない宝物。まさに人生の師なのです。

東京音楽大学で 学ぶことは

オーケストラは室内楽の延長線上にあると私は思います。大学の授業で室内楽を勉強したことは、今非常に役立っています。オーケストラの団員として、ど

のようにアンサンブルをするべきか、どのような音を出すべきか、東京音楽大学の室内楽の授業でその基礎をみっちり学ぶことができました。オーケストラは決して指揮者だけを見て演奏すればよいというわけではありません。ほかの人の音を聴きながら、その様子を見ながら演奏しなければなりません。そうしたときに、室内楽の授業で学んだことが生きているのが実感できるんです。

また、音楽大学では音楽が生活の中心になります。授業や演奏会などを通じてさまざまな人と出会い、共に活動し、多岐にわたった経験を重ねる…。それらのことは実はとても大切なことです。音楽以外の経験が演奏に生かすことが多々あるんです。学生たちには音楽一辺倒にならず、たくさんのご経験を勉強し、人間として成長できるような大学生活を送ってほしいと願っています。



卒業生インタビュー

INTERVIEW

東京音楽大学ならではの 教員養成プログラムとは？

— 教育現場の今と未来 —

卒業生であり、本学教職課程で教鞭をとられている和田崇先生、同じく卒業生で川越市立教育センター所長の小熊利明先生をお迎えし、本学の工藤豊太教授よりお話をうかがいました。



右から工藤 豊太先生、和田 崇先生、小熊 利明先生

教員になった経緯

工藤 まずは、先生方の学生時代の思い出や、教員になった経緯をお聞かせください。
小熊 東西ドイツの演奏旅行や、多くの先生方の直接指導を通して、大学在学中は本当にいろいろな経験をさせていただきました。卒業後、教員になってからも、それらの経験が大いに役に立った記憶があります。

和田 私の印象に残っていることは、初めてガムラン音楽を耳にしたとき、西洋音楽の尺度ではあり得ない音楽があると驚かされたことと、中国への演奏旅行ですね。中国での音楽教育を実際に見てきました。中国での音楽教育というか、幼いときから特別な指導をする仕組みがあるのにはびっくりしました。

小熊 私は、大学3年の芸術祭で実行委員長を務めました。自分が学んできた音楽を生かすことができ、お金が動き、いろいろな組織と関わる仕事を面白く感じ、それが教員という職業を目指す契機になりました。

ところが、現役の先生が学ぶということは、実際には結構難しい。教員になって給料をもらうようになれば、そこから先は自分の意志で学ぶわけですから。学び続ける意志、「学び続けることは面白い」と思う気持ちをもって人と、残念ながら若いときに身につけられなかった人では、20年、30年と経過すると、ずいぶん差がつく気がしてなりません。

視野を広げる

工藤 今の学生は非常に演奏技能が高く、また、コツコツとやり続ける姿勢もできています。ただ、それらを統合的にまとめて、自分の強みにする力に欠けているようにも感じます。音楽教員は、いろいろな楽曲を知らなければならぬのに、音楽大学にながら知らない曲が多いなど…。学生は、どうしたら視野を広げられるでしょうか？
和田 音大生はクラシック音楽の勉強をしているため、どうしても、物事をその物差しで測ろうとします。私の場合、3年次のときのガムラン音楽との出会いによるショックが功を奏し、「世の中はクラシック音楽だけじゃない」と、いろいろな音楽に興味をもち始めました。その結果、「日本の音楽もなかなかいい」と、音楽観とともに、ものごとの価値観も広がったんです。

工藤 本学には付属の民族音楽研究所があったり、学生に積極的に学ぶ気持ちがあれば、専門の先生方がたくさんいらっしゃるんで、学生たちは力をつけることができると思います。それらは、教員になったときには大きな力になるものと、私は信じています。

ところで、お二人とも、採用試験の面接官をされる機会が多いと思いますが、どの



場では必須です。非常に負い目を感じていましたね。ですが、それゆえに、歌えない生徒の気持ちや、とてもわかった気がします。できない生徒の気持ちをわかって指導すること、また、正しく指導するためには、本物の音を知っていることが大事なんです。
和田 教員に必要な資質として挙げられることは、まずは、相手に自分の思いを的確に伝える力、つまり、コミュニケーションとプレゼンテーション能力でしょう。加えて、「音楽の素晴らしさをあらゆる手段で伝えたい」という、音楽教育への使命感とプライドが必要だと思います。

小熊 学び続けることや音楽の専門性、和田先生がおっしゃる、コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力などが大事でしょう。
現在、私は埼玉県川越市にある、教育センターにいます。そこは教員の研修施設で、初任者から大ベテランまでを研修していますが、大ベテランの方が真摯に学ぶ姿勢というのは、美しいもの。現場でその姿勢を出す、若い先生は必ず見習うと思います。



和田 私の場合、卒業後、たまたま楽器店が募集していた、臨時のリコーダー講師になりました。小学校をまわってリコーダーを教えているうちに、その面白さを知り、教える技能が高ければ高いほど子どもたちがついてくるのを目の当たりにして、「私には教えるのが向いているかもしれない」と思ったんです。

教員に求められる資質とは

工藤 お二人とも初めから教員を目指していたのではなく、自分探しを行っているなかで、教員という仕事が自分に向いていると感じてスタートされたようですが、教員に求められる資質とは何でしょうか？

小熊 大きく言うと人間性、平たく言うところいろいろを経験しているとか、そういった点が教員になるためには不可欠だと思います。また、私は専攻がフルートだったので、ピアノと歌が得意ではありませんでした。ところが、それらは学校の教育現場で求められる資質ではないのでしょうか？

和田 面接は、する方も受ける方も、非常に難しいのですが、いろいろと体験した人の方が、話に説得力がある気がします。机上論だけでは、「ホントに大丈夫？」といった印象を受けますので。

和 同感です。知識だけでは対応できない世界ですから。自らの経験が、動機、目的とつながっていなければ、説得力のある生きた答えになりません。私も、学生時代いろいろなところでアルバイトしたりして、臨機応変に対応しているうちに、いろいろなことを覚ええました。それが、今のものすごく生きています。面接担当者は、そうした可能性を知りたいのです。

教育ボランティアの重要性

工藤 大学以外のところでいろいろ吸収するものが、その人の資質になっていく。その意味では、教育ボランティアもとても大切ですね。

和田 教育実習の前に、現場の学校の様子を少しでも見学する経験があると、とても役立つでしょう。どの程度の大きさの声で





授業をすればいいのか、どのくらい動かないと音楽教室を一周できないのか、それらを知っておくだけでも、ずいぶん違うと思います。

小熊 相手（生徒）を知ることは大事です。学生は本学で音楽の専門性を学びますが、一度その専門的な視野を外して、「子どもの前に立ったときの自分に何ができるか」ということを、大学時代から見つめてほしいと感じます。

工藤 生徒たちの雰囲気や、一緒に遊びながら全体で感じるのが大事なので、子どもたちと身近に接することができるよう、本学では、学生たちを近くの小学校から高校まで、授業の現場に連れていっています。

絶対に辞めない教員に

工藤 現実的には、途中で辞められる先生もいらつしゃいますが、私は、常日頃から「先生になったら、絶対に辞めないでほしい！」と、学生たちに言っています。

小熊 確かに、教員という職業が合わず、辞められる方も見えました。教員になる前に、自分は向いているかどうか、一度フイルターにかけてみるのも大事だと思います。

和田 若い先生方は非常に優秀なのですが、挫折を知らない。生徒から抵抗されたりすると、ショックを受けて挫折し、立ち直れない若い先生はいらつしゃいますね。**小熊** 皆さん、技術的なレベルは高く、音楽の質も高い。それは、教員として現場に出ていく際には、とても意味のあることです。子どもは本物にすぐ反応しますから。専門性を身につけているということは大きな武器になります。

私は学生時代に、池辺晋一郎先生の紹介

教員採用試験合格者数(2015年12月7日現在)

都道府県名	4年生(現役生)	卒業生
東京都	5名	6名
千葉県	1名	3名
埼玉県	1名	0名
神奈川県	0名	1名
栃木県	1名	0名
静岡県	0名	1名
愛知県	0名	1名
合計	8名	12名

在学中、教育現場を想定した実践的な授業を経験

■西川真子

音楽教育実技専修コース(ピアノ) 大学4年

さいたま市教員採用試験合格

現場を想定した実践的な授業で、将来直面する課題に取り組み

さまざまな教育現場で役立つカリキュラム

東京音楽大学の教職課程では、実際に教える現場を意識したカリキュラムが多く組まれているのが、大きな特徴だと思います。生徒から相談を受けた場合の対応などが身につく「教育相談概



論」、模擬授業が行える「音楽科教育法」「教職実践演習」、教員採用試験に必要な面接対策や、小論文の書き方、話す力を身につけるための「教職特別演習」などがあり、教員採用試験対策に直結しています。

現場を想定した実践的な授業で学んだ、将来の問題解決の大きなヒント

今、学校で問題になっていることを考えるグループディスカッションに参加したことも、とても有意義でした。生徒が抱えている問題についてどう考え、どのように対処するか、あらためて考えると、わからないことがたくさんあることに気づきます。疑似体験とはいえ、在学中から、そうしたことを具体的に考え、自分なりの答えを出す機会を得たことは、将来必ず自分にとって役に立つ、知恵の引き出しになったと思います。そうしたシミュレーションができる授業のおかげで、実際の教育実習中に生徒から相談を受けたときも、冷静に聞くことができ、生徒に

で、演劇の舞台でフルートを演奏するアルバイトを3年間続けました。そこで学んだのですが、役者の方々は、その日の観客の雰囲気によって芝居を変えるんです。生徒のコンディションも、日によって異なります。教員は毎日それに自分を合わせなければいけません。教員は、役者のように振る舞わなければいけません。そうしたことを大学にいる間に気づいていない、十分に学んでいないのではないかと感じます。

感動を与える音楽教員

和田 人間の成長には「感動」が必要です。音楽の授業では、生徒が音楽を聴き、歌い、演奏することによって、自ら感動することができる。しかも、大勢の仲間とともに、その感動を共有できるんです。そうした、人間の成長にとってとても重要なものを、仕事として生徒たちに経験させることができるのが、音楽教員の醍醐味だと思います。

工藤 一方、たとえ新人でも、赴任したら入学式・始業式に、全校生徒に校歌を歌わせなくてはなりません。また、国歌「君が代」を弾くことが求められます。それができなかったら教員として認められないという、大変な一面も音楽教員にはありますね。

和田 生徒の知識や演奏技能だけを高める音楽教育は、すでに過去のものになりつつあると思います。思考力・判断力を養い、「自分はこう演奏したい」「作曲家はなぜその曲を？」といったことを、自ら積極的に考えていくような音楽指導が必要になっていくでしょうね。

東京音楽大学の教職課程とは

工藤 これからの時代に必要な、皆さんの後を継いでもらいたいと思う教員とは？

とってよりよい方向へ導くアドヴァイスを考え出すことができたいです。また、私が受験した、さいたま市の教員採用試験の2次試験では、生徒に見立てた先生が投げかけてくる質問に対応する場面指導や、具体的な対応策を問われる個人面接がありました。また、そのときも自信をもって受け答えることができました。また、実際に教育現場で教鞭を振るわれて、先輩方の話を聞く会もありました。教員採用試験対策の勉強方法や試験内容の傾向、合格してから赴任するまでの準備活動まで、経験にもとづいた生の声を聞けたことは、とても貴重な体験です。すでに現場で教えている先輩から、これから教える後輩へ、音楽教師という職業を通じて、在學生と卒業生の「つながり」をもてるのも、東京音楽大学ならではのと思っています。

■大西小百合

ピアノ2015年大学卒業
板橋区立金沢小学校教諭

本学の指導内容を信じて学べば

採用試験は合格できる授業を録音して繰り返し聴く

私は、大学入学時から、教職課程を履修することを決めていました。そのカリキュラムには、



「教育心理」や「教育行政学」などの座学や模擬授業など、教員採用試験対策や実際の教育現場で役に立つ、各種の実践的なプログラムが用意されていて、とても有意義でした。

先生方も、教員志望の音大生がするべきことを熟知されていて、私は毎回の授業を録音し、それを繰り返し聞くだけで、無理なく自然に内容を身につけることができましたので、それほど苦労することなく合格できたと思います。試験では面接もありましたが、音楽学のゼミや、ミュージックコミュニケーション講座などで、数多くプレゼンテーションの経験を積んでいたため、自分の考えを相手に伝える力を身につけられました。そして、本番と同じ状況で面接の練習をする講座もあったおかげで、「すんなりと試験にパスすることができた」というのが、

和田 上手に教えることができなくても、それに打ち勝つ強い精神力、音楽への愛情と、その素晴らしさを伝えようとする使命感と意欲、それらをもち続けていく教員として、現場に羽ばたいてほしいと思います。教える技術は後からついてくるものですか。

小熊 私も同感です。教員としてのトレーニングはOJTで学べます。せっかく大学で音楽を学んでいるのですから、それを武器に自分で切り拓いていくような教員になれるように、大学生活を送っていただければ、後は教員になってからいくらでも学んでいけます。まずは、人間としての「核」を、東京音楽大学での4年間で作ってもらいたいと思います。

工藤 本学では、学生の7割近くが教職課程を履修していますが、そこでは、「人間性や社会性を培う学びの場」として、「人間教育」を行っているんです。単に教員採用試験に合格するためではなく、そこで学んだことを自分の人生に役立てていく。先生方から人間として学び、成長していくのが、本学の教職課程の魅力だと思います。たとえ将来教員にならなくても、本学の教職課程の授業は、必ず生涯役立つっていくでしょう。

先生方の思いを、本学の教員養成プログラムの中で生かしながら、今後も、よりよい教員を育成していきたいと思っています。本日はありがとうございました。(敬称略)

*OJT(On-the-job Training) 日営業を通じた従業員教育のこと。
2015年10月1日、本学音楽学部は、明星大学通信教育部と教育業務提携を締結して、これまでの「中学・高校1種免許状」取得に加えて、同時に「小学校教諭2種免許状」も取得できるようにになりました。

正直な感想です。学校ボランティアへの参加は、最高の現場体験

現在は、板橋区の公立小学校で、4年生以上の児童たちに音楽を教えています。赴任初日の始業式では、私が指揮をして全校児童が歌うという試練がいきなり訪れましたが、前任の先生に指導していただき、何とかその場を乗り切ることができました。私の授業で楽器の演奏や歌がうまくなり、子どもたちがこれまで以上に音楽を好きになってくれれば、最高に幸せです。そして、そのための指導方法を日夜考える際、「もっとボランティアに参加していればよかった」と、思うことがあります。

実際の教育現場において、教師が何を、どのように教えているのか、大学時代のボランティアを通じて事前に体験しておくことの重要性を、今、切実に感じているんです。教育実習の際、「教師は役者であれ」と教えられました。私は、まだまだ子どもたちの前で役者になりきれいません。東京音楽大学在学中に先生から言われた、「音楽を教えるのではない。音楽を使って子どもたちを育てるんだ」という言葉を胸に、音楽をツールとした最高の役者になることを、これから目指していきたいと思っています。

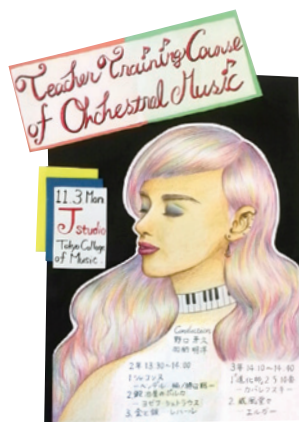
音楽指導者として 必要な資質を修得する



42年前（1973年）に開講され、毎年1学年100名以上が履修する、本学ならではの講座です。
担当教員の野口芳久先生（指揮）と大澤和幸先生（ユーフォニアム）に、人気の理由をうかがいました。

演奏できない子どもの気持ちを知る

「教職課程管弦楽・吹奏楽」の授業では、自分の専攻以外の楽器を体験します。一度でも体験していると、その楽器を前にしても不安は少なくなり、教育実習や実際に教壇に立ったとき、また、部活動で教える際にも、有意義な経験を得られると思います。
ピアノは自分では調律しません。たとえば、ピアノ科の学生が初めてオーボエを吹くと、口の形や息のスピード・量で音程が変わることに驚きます。ヴァイオリンを弾くと、指のしわ一本で音程が変わります。それまでは、ピアノの鍵盤ならどの音が出るはずだと思っていたのが、オーケストラの楽器はすべて毎回調律しながら音を出していること、そして、金管楽器は息の強さとスピードだけで低いドの音も高いドの音も出ること初めて気づきます。そのことだけでも、視野が広がるのです。
この授業を履修する学生の大半は、初めて触れる楽器を手にするため、最初はあま



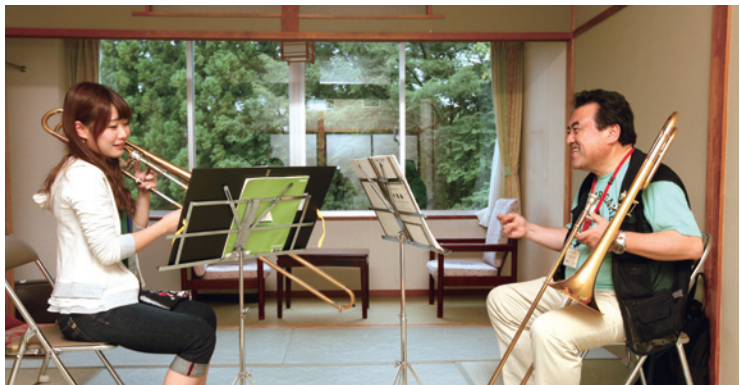
ポスター係が手作りで作成



教育現場に必要な、さまざまな仕事を体験

この授業では、毎年、夏に長野県の信濃町で合宿を行っています。その中に、地元

りうまくはありません。ところが楽譜は読めるし、頭の中には自分が求める音が鳴っています。そのため、こんなに難しいものかと、もがき苦しみます。同時に、指導する教員も学生の横で演奏しますので、その楽器の本物の音も聴いている。この経験こそが非常に貴重で、卒業後、学校で生徒に教える場合、「こんなこともできないのか」と思いながら接するのではなく、「自分も初めて手にした楽器で苦労した」と、相手の気持ちを汲むことができるんです。自分の経験をとおして生徒に温かく接することができることではないでしょうか。



の小学校で演奏し、5・6年生の児童たちに楽器体験してもらおうプログラムがあり、子どもたちは、初めていろいろな楽器に触れて、喜々として楽しんでくれます。学生たちは指導者として教えるわけですが、そこでも他の楽器体験が役に立っています。また、他には例がないと思いますが、この授業では、学生が、合宿や演奏会の役員や係として、企画・運営、楽器の手配、宣伝、会計報告などを担当します。それらの体験も、実際の教育現場で役立つでしょう。司会担当には原稿を何度も直させ、目の前でしゃべらせてチェックします。また、事前に演奏会の現場に行き、楽器の管理や、椅子の並べ方など、綿密に計画を練らせます。ひとつの演奏会を行うためには、こういう仕事があるのか体験させます。実際の教育現場では、自分一人ですべて行わないといけません。演奏会のマネージャーメントを事前に理解するわけです。ジュラルミンケースにはどの楽器をどう入れるか、ケースごとに責任者を決め、楽器を取り出すときにもチェックさせるなど、体験項目は詳細にわたります。また、役割分担も明確にして、自分が何をすべきかを指導します。たとえば役員になった学生は意識が高いため、自分ですべて動いてしまいがちですが、「君たちの仕事は指示を出して人を動かすこと」とだと教えます。そして、時間がたつにつれて動かせるようになっていく。会計報告も1円でも違っているとダメなんです。
この授業の最後の仕上げとして、毎年1月に定期・修了演奏会を開催しています。2年と3年に分かれて、演奏しますが、当初は、あれだけ苦しんでいた学生たちも、さすが音大生だけあり、それなりの演奏に仕上がるのには、いつも頼もしく感じるも



のです。一般的に、学生の大半は、知識を学ぶだけで教育現場に飛び込みます。そして着任後のセミナーで、初めて実践方法を習得します。しかし、東京音楽大学では、それを在学中の授業の中で事前に行っているんです。ですから、学生たちには、「どうしたら子どもが喜ぶか」「どうしたら授業が上手いくか」、絶えず自分の頭で考えてほしいと思います。

毎年、この授業を履修した卒業生たちが、目を輝かせて音楽の授業に臨む生徒たちのことを、誇らしげに報告してくれます。それが、私たち指導陣の誇りなのです。

北村由里子 音楽教育1998年大学卒業 東京都立駒場高等学校教諭

一流の音を知り、上手にできない気持ちを理解する

「教職課程管弦楽・吹奏楽」の一番の特徴は、実際の音楽教育の現場では自分一人ではやらなければならない、いろいろなことを、在学中から授業の中で経験できることです。また、一般的に音楽教育の実技では、ピアノと声楽を学びます。そのほかの楽器の指導方法や、課外活動で吹奏楽を指導する上で必要なことを学ぶ機会は、めったにありません。東京音楽大学では、この授業により、そういったことを在学中に学ぶことができるんです。

教職課程管弦楽では、高校時代オーケストラ部で少し経験があった、コントラバスを担当しました。この授業では、パートごとに一流の先生から指導を受け、その本物



す方々は、音楽教育の現場ですぐに役立つ、生きた体験ができる、この東京音楽大学ならではの授業を、ぜひとも履修していただきたいと思っています。

の音を間近で聞くことができます。それを知ったことは、教壇に立っている今、とても有意義だったと思っています。また、同授業では、初めて吹いたホルンに、「管楽器はこんなに大変なんだ」と、つくづく思い知らされたものです。「高い音を出そう」とすると苦しくなる。「息が続かない」など、実際にやってみないとわからないことは多いもの。その体験から、今では自分が教える生徒の苦労や努力がわかり、理解できるため、彼らとの距離はとて近くなりました。

心に刻まれた先生の言葉

本学は実技指導を大事にする大学です。実技の実力を高めて教員になると、生徒への説得力も強まります。そして、楽器の演奏方法やアンサンブルの勉強だけではなく、先生方のご指導から、教員のあるべき姿についても、実に多くのことを学びました。野口芳久先生の、「卒業して教壇に立ったから、演奏技術や音楽の楽しさを教えるだけではなく、この授業で学んだすべてのことを、皆さんが赴任したそれぞれの学校で、次の世代に伝えてください」という言葉は、今も私の心に深く刻み込まれています。これから東京音楽大学に入学し、教員を目指す方々は、音楽教育の現場ですぐに役立つ、生きた体験ができる、この東京音楽大学ならではの授業を、ぜひとも履修していただきたいと思っています。

作曲「映画・放送音楽コース」／作曲ポピュラー・インストルメンツコース／
作曲「ソングライティングコース」

音楽創作の原点に戻り、 曲の本質を追求する

作曲の原点に
回帰する

クラシック音楽の
確固たる基礎が
あつてこそ、

コンピュータ使用の
意味が

小六禮次郎 教授

音楽制作におけるコンピュータの役割は1980年代後半から急速に発展し、90年代にはいわゆる「打ち込み」と「DTM（デスクトップミュージック）」が主流になり、音楽制作現場に大きな革命が起きました。しかし、その利便性ゆえに、「コピー&ペースト」という手法が波紋を投じることもなっています。私はコンピュータを否定しません。し

かし、それは「音楽の基礎II土台」があるという前提でこそ生きるもの。それらをしつかり習得した上で使用するべきだと思います。

西洋音楽は、その歴史など重厚な基礎の上に作り上げられ、発展してきました。作曲「映画・放送音楽コース」で学ぶ皆さんには、まずはそうした西洋音楽の基礎をしっかりと学び、理解していただきたいと思えます。確かにコンピュータは便利なツールです。音楽の専門知識がなくとも曲は作れますが、建築物と同様に土台がしっかりしていなければ、やがては倒壊してしまおうでしょう。

ビートルズは、なぜ名曲を数多く生み出したのでしょうか？ それは、各メンバーがそれぞれ幼少時から教会で賛美歌を歌いながら、和声をはじめとする西洋音楽の基礎を自然と身につけていたからではないかと私は考えています。

せっかく音楽大学に通われるのであれば、その環境を有効に生かして、西洋音楽の基礎をしっかりと勉強しながら、音楽の幅や可能性を広げていただきたいと思えます。



作曲「映画・放送音楽コース」

机上だけではなく、
実体験で
豊かな音楽を

Kosuke Yamashita
山下 康介 客員教授



最近ではDTMにおけるソフト・ハード面でのスペックが格段に向上し、音源もふんだんに提供されているため、コンピュータだけで音楽制作を完結させることも可能です。ただ、その結果、テクニカルな性能に頼りすぎて、個性が少なく似たような曲も多くなる、といった物足りなさも感じています。と、同時に、特に生楽器のシミュレーションにおいて、とても不自然なものも耳にするようになりまして（もちろん、その不自然さが必要であれば別ですが）。

本来、音楽活動とは一人だけで完結するものではありません。人が作り、演奏し、そして聴くものです。そこで重要なのは、多くの音楽は人間によって演奏されることを常に忘れてはならない、ということ。学生の皆さんがDTMで曲を作る際にも、それをイメージしたデータ作成を心がけてほしいと思います。たとえば、管楽器ならば、息づかいなど、より自然なフレージングを追求していただきたいのです。

また、より豊かな表現を望むのであれば、机上の勉強だけでは不十分です。やはり、自分が書いた楽譜を実際に演奏してもらおうといった、実体験の場を積極的に作るべきです。あるいはオーケストラでもバンドでも、生演奏を聴くという機会も必要ですし、また、ミッシェル・ルグラン、ジョン・ウィリアムズといった、歴代の巨匠たちの作品も貪欲に聴いて、ただ楽しむことだけでなく、音楽的な



分析等を積み重ねていただきたいです。

スタジオ録音においては、予算などの都合もあり、希望するすべての楽器を生で収録することは難しいことも現実的にあります。たとえば「ドラムとベースは打ち込みでいい」と決めつけてしまうのではなく、よく検討することが大切です。人が演奏することで、同じ曲でも何倍もいきいきとするでしょう。



結果的に、作った人も演奏した人も、また聴く人も、みんなハッピーになれるのだと思えます。本学には優秀な器楽専攻の学生が多く在籍していますので、率先して交流を深めてください。

これから進学される皆さんにも、作曲専攻「映画・放送音楽コース」ならではの曲作りを学び、体験してほしいと願っています。

作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」

自分の名前で
勝負できる

「楽器演奏者」たれ

Yoshihiro Naruse
鳴瀬 喜博 客員教授

作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」は、音楽制作全般をプロデュースし、演奏・制作現場でのディレクションができ、作曲能力をもつ人材の育成を目指していますが、私は、まずは「楽器演奏者」として自分の名前で勝負できる、つまりどんなスタジオワークに呼ばれても通用する「演奏技術」と「コミュニケーション能力」をしっかりと身につけてほしいと思っています。



DTMが主流になってきている昨今、部屋にこもって一人で楽曲制作を完結することも可能ですが、楽器演奏者はそれだけでは成立しません。「演奏」で音楽を表現し、「言葉」で語る。アンサンブルする際、自分がどういうコンセプトで何を表現しようとしているのかお互いにお互いにつけ合い、より深い音楽を作っていくということが重要です。またそうした演奏&コミュニケーション能力を身につけることによって、仲間を広げていく姿勢がとても大事なことです。その結果、新たな人間とのつながりも増え、自分の将来の道が切り拓かれることにもなると思います。加えてその一方で、作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」は音楽大学の専門コースでもあり、高い意識をもって曲作りにも取り組んでいただければ

ればと思います。一人では難しい場合には、他のコースや専攻の学生たちと積極的にコミュニケーションを図り、自分のコンセプトやイメージを伝えてフィードバックしてもらうことで、新たな発想が芽生えることもあるでしょう。そうしたことができるのも東京音楽大学ならではの「楽器演奏者」として羽ばたいてほしいと思います。



Yashiro Morita
森田 悠介 作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」
2010年大学卒業

入学時から、楽典やコード理論など基礎をしっかりと勉強し、2年次には映画・放送音楽コース在学中の先輩のレコーディングで曲を編曲、ディレクションまでするという授業もありました。また、好きなベーシストの演奏をフルコピーして譜面にするという課題も毎週あり、プロになった今、あのときしっかりと取り組んでよかったとつくづく感じます。

このコースは、作・編曲できるレベルまで学べるのが強みです。しかも、私たちには楽器という武器がありますから、その場でそれを音楽にすることができ



Yoshihori Inai
今井 義頼 作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」
2010年大学卒業

今の私には、「ピアノコードワーク」の授業がとても役に立っています。それは、ある曲で使用されているコードを全部聴き取り、授業で発表するというもの。ドラマー志望者にとっては厳しい課題でしたが、この授業のおかげで、今ではレコーディング時に、他の楽器の音がすべてわかり、演奏現場での対応も格段に速くなっています。

東京音楽大学には、自分に有益な情報と機会が山のようにあります。早めに「自分が何をやるべきか」を見つけて、それをやり遂げる強い気持ちが必要です。皆さんを全面的にサポートしてくれる、贅沢な体制が整っているのですから。

作曲「ソングライティングコース」

「音楽的な作詞」とは？

言葉とメロディの
関係を学ぶ

Yukio Mori
森雪之丞 特別招聘教授

常日頃、私は「作詞家」は「音楽家」だと思っています。そのため、一般大学の文学部ではなく、東京音楽大学という、音楽大学で授業ができることは、私にとってはとても意味深いことです。

日本のミュージックシーンが、シンガーソングライターやバンドの時代を迎え、彼らが自分たちで作詞作曲するようになったことで、歌詞はメロディと一体化を強め、より重要な音楽構成要素に進化しました。また、ラップミュージックは、基本的にリズムに乗せた言葉の面白さだけで、今の人気を勝ち取っています。

こうしたことは、以前の歌謡曲全盛時代、作詞と作曲が分業制だった頃には考えられませんでした。しかし、今やそれが当たり前のように支持されていることは、音楽における言葉の役割が、大きな変貌を遂げた証だと思います。

現在の日本のポップ・ミュージックは、その9割がメロディ先行で作曲されています。すでに書き上げられた譜面の音符の上に、言葉をはめ込んでいくわけですが、そうした制約の中で言語表現すると、そのメロディには新たなリズムが芽生え、音楽として生まれ変わっていきます。歌詞は一つの楽器なのです。一般的には、自分が好きな言葉、

かっこいい言葉を選び、それを並べたものが歌詞だと思っている人も少なくないと思いますが、ヒット曲を非常に細かく分析すると、そこにはいろいろな法則やテクニックが隠されていることがわかります。私の授業では、促音、撥音や英語的なノリをもつ言葉の活用など、実践的な作詞方法を紹介していきます。

最終的にでき上がる歌詞は、それを書いた本人のセンスでしかないので、私は作詞のセンスは教えられません。人生はセンスを磨くためにあるのですから。私が教えられることは、歌詞を作り上げる前の「言葉の扱い方」をブラクティスすることです。もちろん、言葉をいくらかうまく操れても、必ずしもいい歌詞が書けるとは限りません。しかし、操る術を知っていたほうが、いい歌詞を書ける可能性は高まります。私の授業では、まずはそれを修得してほしいと思っています。

Koshiro Ashikawa
石川 晃士郎 作曲「ソングライティングコース」
大学3年

「音楽」と「言葉」で表現する

私は、小さい頃からピアノを習い、小学校高学年からミュージカルの学校にも通い始めました。当時はそれほど積極的には取り組んでいなかったように思いますが、中学生のときにたまたまニューヨークに行く機会があり、そのときブロードウェイの「フォッシー」(FOSSIE)の舞台を見て、演じる方々の表現力の豊かさに、鳥肌が立つほどの感動に包まれたんです。

そのとき以来、音楽との向き合い方が変わり、積極的に表現することを目指し始めたと思います。

その後も音楽、ダンス、芝居を続けましたが、高校2年のときに歌に注力することを決意しました。高校卒業後はいったんミュージックスクールに入り、ピアノの弾き語りやコーラスの仕事をした日々を送りました。

しかし、将来を考えると「音楽」と「言葉」の基礎をしっかり学ぶ必要があると強く感じ、東京音楽大学の作曲「ソングライティングコース」に入學したんです。入学後1年目では、谷村新司先生から「言葉」と「メロディ」の関係について徹底的に教えていただき、2年目にはDTM(デスクトップミュージック)での作曲方法を学びました。毎年年度末には制作課題があり、自分がDTMで作った曲に歌を入れるレコーディングのディレクションも行います。

作曲「ソングライティングコース」の大きな魅力は、音楽業界の第一線で活躍されている先生方から、「どうすれば『市場』で『聴き手』に受け入れてもらえるか」ということを、客観的な視点からヴィジュアルに指摘していただけることです。また、「映画・放送音楽コース」「ポピュラー・インストゥルメンツコース」をはじめ、他専攻の学生とコラボレートしやすいことも大きな特徴だと思います。自分が作詞・作曲した楽曲を、「映画・放送音楽コース」の学生がアレンジし、楽器専攻の学生がオーケストラで演奏するといった、ポップスとクラシックとの融合も可能なのです。

こうしたダイナミックな広がりには学生のときから挑戦できることは、東京音楽大学ならではの魅力ではないでしょうか。



バイエルン州立青少年オーケストラ 合宿参加

教授・学生座談会

2015年10月15日

2015年7月28日～8月12日



ドイツ・バイエルン州が主催し、バイエルン放送交響楽団のメンバーが主に指導する、バイエルン州立青少年オーケストラ（b.j.o.）は、毎年、夏と冬に演奏旅行を兼ねた合宿を実施しています。本学は、1999年より同オーケストラの合宿に学生を派遣しており、2015年の夏には、東京音楽大学から10名が参加しました。

クラシック音楽の故郷を知る、本学ならではの貴重な機会について、視察された先生と参加した学生の方々にお話をうかがいました。

ドイツ人学生の積極性

店村先生 まずは、今回参加された感想は？

伊澤さん 実は、このプログラムの存在が、東京音楽大学に入学する理由のひとつでした。ドイツの著名な楽団の先生から学べ、現地の若い演奏家たちと一緒に演奏できることが、とても魅力的だったんです。

世川さん 私は2回目の参加でしたから、何人かとは1年ぶりに再会しました。短期間とはいえ、演奏を通じて苦楽を共にした仲間と再び出会えたことは感動的でしたし、今回は音楽でも言葉でもコミュニケーションが取れるように、自分から積極的に話しかけることができました。小杉さん 私は、言葉の面でどうしても意思疎通が不十分だったと思います。演奏に対する自分の考えもなかなか主張で

せる音というのが確実にある」と、つくづく感じました。こうした海外経験は貴重だと思います。

高い演奏技術力

店村先生 今回、まずは6日間程度、パート別に分奏練習し、それから合奏による練習でしたが、皆さんの感想はいかがですか？

世川さん 演奏者がそれぞれ積極的に自己主張するため、初めの頃はなかなかまとまりがつかず不安でした。ただ、彼らは同時に、他の人の音にもとてもよく耳を傾けているため、日に日に演奏がまとまっていくそのスピードには、2回目の参加とはいえ、あらためて驚かされました。

伊澤さん 分奏練習の際にバイエルン放送交響楽団の先生から、そして合奏時に指揮者の先生から指示されるフレーズのニュアンスが、明確、具体的でとても勉強になりましたし、その指示にどんどんついていく、ドイツの学生たちの演奏技術と情熱は大変勉強になりました。

一番の収穫は？

世川さん 今回の一番の収穫は、クラシック音楽が生活の中に自然と溶け込んでいる、ヨーロッパの文化を「耳と肌で感じたこと」です。移動中のバスの中で唐突に演奏を始めるなど、日本ではまずあり得ないと思います。

小杉さん 日本なら、流行しているポップスが流れるようなカジュアルなお店でも、クラシック音楽が自然に流れている。日本では少し敷居が高いクラシック音楽も、向こうでは身近なものなんです。そうしたことを知っただけでも大きな収穫でした。



日本人の謙虚さはヨーロッパでは理解されにくい点ですが、だからこそ、ヨーロッパの演奏者とは違った魅力になる。ヨーロッパの人たちの積極性と日本人の協調性が合わさると、素晴らしいアンサンブルになるんです。

皆さんはこのプログラムに参加して、帰国後、自分の音に対する考え方が変わりましたか？

小杉さん ドイツの学生たちの、日本人とは違い積極的に自分を主張して、前に押し出してくる音を初めて間近に聴いて、「自分の音を変えたい」という意欲が出てきました。

今回のような新たな刺激を受けると、「もっと頑張らないと！」と気持ち引き締まります。

伊澤さん 私も、彼らの積極的な演奏と音量には驚きました。このプログラムで経験した音を、そのまま模倣するのではなく、「自分の音を見つけない」と思うようになる、とてもいいきっかけになりました。

世川さん 実際に現地の文化や生活に触れてみて、「日本だけにはいては、ドイツの分厚く暖かい音を出すのは難しい。その国の文化や食べ物、空気だからこそ出



店村 眞積 教授 *Mazumi Tanamura* ヴィオラ
伊澤 萌音 *Mone Izawa* ヴァイオリン 大学3年
世川 すみれ *Sumire Segawa* ヴィオラ 大学4年
小杉 由香子 *Yukako Kosugi* コントラバス 大学1年

伊澤さん ヨーロッパの学生たちには、言葉が多少通じなくても、どんな交流を図ってくる積極性があります。練習中も休憩時間中にも、日本人がどのように考えるのか知ろうとする。

店村先生 日本人はどうしても言葉がわからないことに負い目を感じて、演奏面でも消極的になりがちです。日本人独特の謙虚さや控えめな部分をもちつつも、自分の音楽を表現できるようにすることが大切だと思います。

伊澤さん 自分が予想しなかった、多くの素晴らしい経験と出会えたことがよかったです。

今回演奏した会場も、野外の石畳の会場など、ヨーロッパ独特なところが多く、現地で演奏したからこそ、そこで響く音の特徴も知ることができました。

小杉さん 音楽観が絶対に変わりました。ヨーロッパの文化や生活を体感すること、現地の空気を吸うこと。日本にいてだけでは絶対にできない経験、感じることでできないこと…。それらを体験できる絶好の機会だと思います。

店村先生 現地に飛び込むことは本当に重要です。すぐになじむことはなかなか難しいとは思いますが、すべてを吸収するつもりで、思い切りやってみてほしい。その場の空気や文化を感じることで、演奏にも必ずよい影響が出てくる。

こういうプログラムはぜひ積極的に活用してほしいと思います。



「歌」が好きなら どんな未来へも 羽ばたける



Yuko Kamahara
釜洞 祐子 教授

声楽は人間を学ぶこと

東京音楽大学の声楽専攻では、多角的に歌を勉強します。毎週のレッスンでは、現役で活躍している声楽家でもある教員が、マンツーマンで手厚く指導し続け、学生を音楽的に鍛え上げていきます。もちろん、その過程にはいろいろな紆余曲折もあるでしょう。しかし、それは歌と同時に、精神的なトレーニングも果たし、結果的に「精神力」こころのアクセラレーターも強くなるのです。そして、そうした教員とのキャッチボールをコツコツと繰り返していくと、時に自分の声も少しずつ出てきて歌うことが楽しくなり、歌う技術とともに、感動も育っていく。入学してから4年たった卒業の頃には、自然とひとまわりもふたまわりも大きくなっています。また、個人レッスンだけでなく、大勢の人と「声」と「心」を

合わせる合唱があり、オペラや歌曲の歌詞を深く理解するために語学、歴史、文化を勉強し、歌われるドラマを通して、時代や国を超えた喜びや悲しみと向き合っていきます。歌を学ぶことはまさに、我々人間を学ぶことではないでしょうか。

幅広い活躍の場

一般的に音楽大学の声楽専攻には、「就職しにくい」というイメージがあるかもしれませんが。しかし、声楽とは「歌や声」「音楽」を通じて、人間形成を図っていくのですから、将来、社会に出ていく際には、オペラ、ミュージカルといった声楽家や音楽教員、音楽関連企業のみならず一般企業まで、多種多様な選択肢（職業）があり、実際、多くの卒業生たちが幅広い領域で、それぞれ活躍しています。それはどのような職業についても、声楽を学んで深まった情感と、一対一のレッスンや、ホールで客席に真正面から対峙して歌うことで鍛えられた強さにより、人を理解し、適応力や粘り強さを発揮できるからだと思います。

「歌が好き」なだけでいい

ピアノやヴァイオリンなど、器楽を専攻するのは異なり、声楽を学ぶスタートは、大学に入ってからでも決して遅くはありません。ですから、入学時には「歌が好き」なだけでいいの



で、いろいろな夢を抱いていらしてください。受験については、受験講習会やオープンキャンパスで、私たちが指導いたします。まずは、私たちのもとに躊躇することなく飛び込んでいただき、私たちと一緒に自分の求める道をじっくり見つけましょう！
歌うことへの愛着と情熱さえあれば、数多くの選択肢の中から、進む道は必ず見つかるものだ、私たちは確信しています。

「歌」と「演技」 その両方を磨いてこそ オペラは成立する

Yuko Sato
佐藤 優子さん
声楽家

2008年大学卒業、2010年大学院修了

小さい頃、私は内気で、空をボーっと眺めているような子でした。それを少し心配した母の勧めもあって、小学校の高学年のときに合唱部に入ったのが、私の歌との出会いでした。

初めて憧れの「歌」に出会う

今思えば、当初の私は、「とにかく歌が上手になりたい。声でもテクニクでも、誰にも真似できないように歌いたい」という思い、その一心で続けていたような気がします。それが大

Profile

東京音楽大学声楽演奏家コース卒業、同大学大学院オペラ研究領域首席修了。在学中、奨学金を得てモーツァルト音楽院サマーアカデミー参加、ディプロマ取得。大学在学中、特待生奨学金を授与される。読売新人演奏会、卒業演奏会、レインボー21(サントリーホールブルーローズ)等学外の様々な演奏会にも出演。二期会オペラ研修所54期マスタークラス修了。修了時に優秀賞及び奨励賞受賞。平成27年度五島記念文化賞オペラ新人賞を受賞。これまで、第18回友愛ドイツ歌曲コンクール学生部最高位(奨励賞)、第7回東京音楽コンクール入選、第7回東京音楽大学コンクール声楽部門1位、第46回日伊音楽コンクール入選。二期会会員、日伊音楽協会会員。

きく変化したのが、大学1年の秋、釜洞祐子先生が主演されたオペラ『夕鶴』を、母と一緒に観に行ったときのことでした。その作品の冒頭、主人公「つう」がとても印象的に歌うシーンがあるのですが、先生のその第一声を聞いた瞬間、なぜか涙があふれ、「私も釜洞先生のようにオペラを歌いたい」という強い気持ちで、瞬時に芽生えたんです。私の心の琴線に訴えた先生の歌…。言葉では表現できないそのときの心のふるえ、それが、オペラへの第一歩を踏み出すきっかけとなりました。

表現力の向上に取り組む

それまでは、「誰にもできない声、歌」と思い続けていた私は、憧れの人、釜洞先生の声に似せるようになっていきました。しかし、とても追いつくことはできません。自分の歌を探す旅は、大学院に入ってからも続き、結局、学生時代は出口が見えませんでした。

大学院を卒業してほどなく、軽い気持ちでニッセイ・オペラ2010のグロック歌劇『オル

フェオとエウリディーチエ』の、アモーレ役のオーディションを受けました。当初から期待はしていませんでしたが、なんと合格してしまっただけです。それが私のオペラ歌手デビューとなり、期待に心が躍りました。しかし、オペラは奥深く厳しい世界です。デビューした舞台では、役柄の心情になりきって、歌い、踊って演技表現する、そして同時に歌でも表現することのむずかしさを身をもって経験し、自分の表現力の乏しさをとことん思い知らされました。デビュー公演が終演したとき、「成長し、満

具体的な目標を

今の私には、東京音楽大学在学中に、現役のオペラ歌手の先生や幅広く活躍されている演出の先生が実践的に指導してくださり、その舞台も間近で観られたことがとても役立っています。また、バレエや所作の実習も魅力的なプログラムです。そして、

一人の先生に限らず、いろいろな先生方からアドバイスをいただけたことが、何よりもよかったですと感じています。

これから音楽、声楽を目指す皆さんには、自分が求めていることをまずじっくり見極め、焦らないこと、そして、学外の目標。たとえばコンクールや演奏の機会などを積極的に作り、それに向けて具体的な計画を立てるといいと思います。私は来年、五島記念財団助成の海外研修でイタリアに留学します。そこでさらなる表現力を習得するのが、今の私の目標です。

東京二期会オペラ劇場 2015年2月『リコレット』(東京文化会館 撮影：三枝近志)



写真提供：公益財団法人東京二期会

私のすべては 恩師によるもの

Myumi Suzuki
歌手・声優
1984年生まれ

恩師に導かれた、 ディズニーマ映画との出会い

今年、日本公開から25年を迎えた『リトル・マーメイド』のアリエル役をはじめ、『眠れる森の美女』『ムーラン』『ターザン』など、ディズニーマ映画の日



Profile

東京音楽大学声楽オペラ科卒業、同大学研究科オペラコース修了。故滝沢三重子氏に師事。水野賢司氏リサイタル『THE WORLD OF KENJI』にゲスト出演。歌手、声優として活動。主な声の出演作品に、ディズニーマ映画『リトル・マーメイド』アリエル、『眠れる森の美女』オーロラ、『ムーラン』ムーラン、『ターザン』ジェーン、『ハンピ2』テーマソング(いのちの歌)、『ローマの休日』(オードリー・ヘプバーン)アン王女、『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』、ベネッセコーポレーション『こどもちゃれんじ』、NHK教育テレビ『天才てれびくん』にて歌唱指導。幼児教育楽曲の実践講師の他、朗読、CM、音楽教育用CD/DVD (NHKソフトウェア、世界文化社等)を多数収録。

音楽を専攻したからこそ 培えたもの

『パート・オブ・ユア・ワールド』はポップスに近い曲です。オーディションで録音した私の歌に対し、後日ディズニーマ社は別のテイクを要求しました。何が違うのか……。しかし、音楽を学べば、発声の身体的なメカニズムを知っていますので、2回目の

収録では異なった発声で歌い、私の採用が決定され、それも歌だけではなく台詞も担当することになりました。

全編の台本が送られてきて、それが『リトル・マーメイド』だと初めて知ります。しかも私はアリエル役。相手役に上條恒彦さん、森公美子さん。とても贅沢なキャストイングの中のデビューでした。

レコーディング本番まではわずか2週間、歌は全8曲。大学時代より滝沢先生から授かってきた厳しいレッスンを糧に、アリエルのイメージを自然な日本語で表現しました。初めての台詞のアフレコでも、大学時代に「歌を演じる」ことを習得し、レッスンで朗読もみていただいていたことが実践で役立ちました。

何でも「ちゃんとやる」

滝沢先生の教えは、「ちゃんとやる」ということでした。緻密な準備によって、考えて、具現化していくこと。関わる一切と真摯に取り組むこと。という意味です。私はその言葉と邂逅し、仕事を始めてから今日まで、ずっとその教えを守ってきました。それは今でも、私のすべての土台。私を創りあげてくださったのは滝沢先生なのです。

以前、私はクラシック歌手にならなかつたことに、どこか負い目を感じていました。滝沢先生にはそれがわかっていらした

ミュージカルでも役立つ クラシック音楽の勉強

Kumiko Wakai
若井久美子さん
ミュージカル俳優
2007年大学卒業

衝撃的だった出会い

私は、小さい頃から歌が好きでした。東京音楽大学付属高等学校に入学して音楽を勉強し、大学からは声楽演奏家コースでオペラを学び、自分はオペラの



Profile

東京音楽大学付属高等学校、東京音楽大学演奏家コース卒業後、同大学科目履修声楽コースに進学。大学在学中は声楽を篠崎義昭、五田市田鶴子の各氏に師事。在学中、第39回国際芸術連盟新人オーディション最優秀新人賞を受賞。東宝ミュージカルアカデミーに入学、同アドバンスコース修了。卒業公演『レミゼラブル』では、コゼット役を演じる。主な出演作に、音楽劇『しあわせのタネ』(ヒロイン役)、『この森で、天使はバスを降りた』(主演バーシー役)、映画『森のカフェ』森野洋子役(ヒューマン・トラストシネマ渋谷、他)等。2013年の新演出版『レミゼラブル』よりコゼットを演じている。

道へ進むと思いいままでした。ところが、大学院科目等履修生のときに、ミュージカル『レミゼラブル』に出会い、そのダイナミックに展開するストーリーとメッセージにとにかく圧倒され、「自分も絶対この作品に出たい」と思うようになってしまったんです。

その思いは強く、その後、東宝ミュージカルアカデミーに入りました。そこでは芝居の演技が最優先されるため、一番苦労しました。年に4回もの試演会があり、来る日も来る日も、朝から晩まで、ときには仲間と一緒に公園でも、芝居とダンスの稽古を続けました。そして継続は力です。ついに2013年の『レミゼラブル』で、コゼット役の座を初めてつかみとることができました。

東京音楽大学で学んだこと

ミュージカルでは、「セリフをしゃべるように歌え！」とよく言われます。私は、音楽大学の声楽科で、いわゆる「ベルカント唱法」を学びましたので、横隔膜を正しく使って息を長く持

続することができません。ソプラノの裏声にも自信がありました。ただ、話すように歌うミュージカルの場合は、その役柄により低音域の地声を要求されることも多く、演出家からは声質の「チェンジ」を頻繁に指摘されるんです。「喉を壊しても地声を強化しろ」と要求され、不慣れた発声には苦労しましたが、同時に「君のソプラノの声はでき上がっている。もうそれを失うことはない」とも評価され、本学で学んだことを生かしながら、自分

でうまく調整できています。また、バレエの実習を大学で受けられるのも貴重です。体の軸が作れますし、仲間に「バレエやってみました？」と聞かれると、思わずうれしくなります。加えて、ミュージカルの世界では、楽譜が読めない方もいらっしやるので、これも強みとなっています。

自由な環境の中で積極的に

東京音楽大学には、学生の気持ちや考えを理解、尊重する気

質があります。私の場合、卒業後のオペラへの道筋を親身に考えてくださっていた先生方に、ミュージカルへの転向希望を打ち明けるのは、とても勇気のあることでした。でも、先生方は、とても快く背中を押してくださいました。これから音楽を学ぶ方には、進む道にかかわらず、本学の自由な環境を十分生かして、どのようなジャンルにも通用するクラシック音楽の基礎を、じっくり学んでいただきたいと思います。

写真提供：東宝演劇部



2枚共、ディズニーファンイベント D23 EXPO Japan 2015
舞浜アンフィシアター © Disney



写真提供: NHK交響楽団

2015年は、パーヴォ・ヤルヴィ氏の指揮によるマーラー『交響曲 第2番《復活》』や、シャルル・デュトワ氏の指揮によるマーラー『交響曲 第3番』など、NHK交響楽団とも数多く共演しました。

合唱 プロのオーケストラとの共演

声楽専攻はもとより、他専攻の学生にとっても貴重な経験は、音楽性の幅を広げます。

プロとの共演で学んだこと

合唱の授業を履修した当初は、まさか、そんな大舞台で歌うとは想像していなかった。大学1年生の夏、初めてサントリーホールでプロのオーケストラと共演したとき、感動で思わず身震いしたことを覚えています。今年10月、NHK交響楽団とマーラー『交響曲第2番』を共演しました。指揮のパーヴォ・ヤルヴィ先生はエストニアの方ですが、言葉は通じなくとも、その繊細かつ力強い指揮に、歌っている私はリハール時から、みるみるうちに引き込まれていきました。身振りやアイコンタクトだけで、先生の意図が瞬時に伝わってくるんです。またNHK交響楽団の演奏からも、息の使い方やフレージングなど、声楽にも生かすことのできるヒントを、数多く学ぶことができました。

これまでも、広上淳一先生や小林研一郎先生など、素晴らしい指揮者の先生方と共演させていただきました。もちろん、歌への指示は先生により異なります。阿部純先生の指導により身についた、どのような指示にも順応できる力は、私の自信となっています。

ピアノの演奏にも生かす

東京音楽大学のピアノ科に入学し、周囲の学生たちの優秀さに戸惑っていた頃、少し気分を変えてみよう、合唱の授業を受けることにしました。ピアノは個人レッスンですが、合唱は全員で作り上げていくもの。そこに興味をもったんです。

実は昨年の、マーラー『交響曲第2番』合唱共演を聴きに行っており、自分もいつか参加したいと思っていました。今回初めてその舞台に立てると決まったときは、本当にうれしかったです。しかも、NHK交響楽団との共演。期待で心が躍りました。

リハールで、指揮者のパーヴォ・ヤルヴィ先生が演奏のズレを指摘されました。それを本番までに見事に修正する演奏家の方々。真のプロの演奏家の実力に、改めて驚かされました。

そして、本番での圧倒的な演奏。舞台から見える、満席のNHKホールのお客さまからの盛大な拍手を聞いた瞬間、鳥肌が立ちました。この貴重な体験を今後の糧とし、自身のピアノ演奏にも生かしていきたいと思っています。

- 東京芸術劇場 世界のマエストロシリーズ vol.3 読売日本交響楽団 4月24日 東京芸術劇場コンサートホール 指揮:小林 研一郎 マーラー / 交響曲 第2番『復活』
- NHK交響楽団 第1817回定期公演 10月3日、4日 NHKホール(写真上) 指揮:パーヴォ・ヤルヴィ マーラー / 交響曲 第2番『復活』
- ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉 第98回定期演奏会(創立30周年記念) 10月25日 千葉県文化会館大ホール 指揮:大井 剛史 ベートーヴェン / 交響曲 第9番
- NHK交響楽団 第1824回定期公演 12月11日、12日 NHKホール 指揮:シャルル・デュトワ マーラー / 交響曲 第3番
- 日本フィルハーモニー交響楽団「第九」交響曲演奏会 12月19日 横浜みなとみらいホール(写真左) 指揮:大友 直人 12月21日、25日 サントリーホール 指揮:小林 研一郎

学んできたことが、人に感動を与える ステージを作りだす

Megumi Sakurai
Megumi Sakurai
坂入 恵美さん(姉)
Mai Sakurai
Mai Sakurai
坂入 真紀さん(妹)
童謡歌手「坂入姉妹」



Profile

共に東京音楽大学付属高等学校、同大学声楽科卒業。在学中より数々のコンクールで受賞し、幼児から高齢者まで幅広い世代を対象に童謡コンサートを開始。また、教材CDやTV、ラジオ、映画のテーマソングのレコーディング、全日空(ANA)や日本航空(JAL)の機内オーディオで歌が採用される他、雑誌への執筆など幅広く活動。著書『童謡で、あの日に会いたい。』(宝島社)は、由紀さおり・安田祥子姉妹の推薦書。キングレコードより、CDアルバム『親子で歌いつこう3世代で楽しめるうたベスト30』『高齢者に人気!介護レクにつかえる歌ベスト』をリリース。筑西ふるさと大使(茨城県)。

日本語の歌での抑揚の大切さ

(姉)恵美さん 学生時代は、付属高等学校・大学と、茨城から片道2時間半かけて通学していましたが、それがまったく苦にならないほど、毎日が充実した楽しい日々でした。高校に入ったとき、音楽のレベルが高い方々が全国から集まっていた、とても驚いたことを覚えています。

学生時代に師事したのは、中学生の頃からお世話になっていた坂本紀男先生でした。大学3年生のときに、由紀さおりさん、安田祥子さん姉妹の童謡コンサートに同席の機会があり、「ふるさと」を聴いて感銘を受け涙が止まらず、日本語で歌うことの素晴らしさを実感したんです。

坂本先生は、クラシックだけでなく日本の歌も歌われる先生で、日本の歌を歌ってみたいとお話したところ、クラシック曲と日本の歌のレッスンをしてくださるようになりました。レッスンは、外国語と日本語の歌い方の違いを、わかりやすく丁寧に教えてくださり、「クラ

シックはコンサートホールの後ろまで声が届くように1音1音を響かせて歌うが、日本語で歌う際には語りかけるような抑揚を大切に」などご指導いただいたことも、私たちの大きな財産になっています。

安田姉妹の歌声との運命的な出会い

(妹)真紀さん 私は、最初は姉の真似をして歌の勉強をしていただけで、歌が好きというわけではなく、歌うことが苦手だから克服したいという気持ちでした。そんな私を変えるきっかけになったのが、由紀さんと安田さんのコンサートでした。お二方の歌声、ハーモニーを聴いた途端、日本語の歌詞がスーッと真っ直ぐに身体に入ってきたのです。と同時に、本学出身の中学時代の恩師(私たちに坂本先生をご紹介くださった音楽の先生)が、以前、「君たちは2人とも音楽高校に進学するのだから、ぜひ姉妹でデュエットして、由紀さん安田さんのように童謡を歌ってみてはどうか」とおっしゃっていたことが、突然脳裏をよぎりました。

それを機に、私たちは、一気に童謡にのめりこんでいきました。坂本先生から、「姉妹のデュエットは、『1人+1人=2人』以上のハーモニーを生み出せる」と、背中を押していただいたことも、とても心強かったです。



今の私たちを培った貴重な経験

(姉)恵美さん 由紀さんたちのコンサートに伺い、坂本先生に日本語のレッスンをしていたので、ようになってから3か月後、2人で童謡を歌ってみないかと、初めて仕事の依頼がありました。その後、少しずつ仕事をいただくようになり、在学中から童謡歌手、歌のお姉さんとして活動を始めました。

童謡もクラシックも土台は一緒です。大学時代、音楽療法やリトミックの授業で学んだことも今の活動に生かされています。高校のオペラの授業では、高橋啓三先生にステージに立つ際のステージングを教わっていたり、大学の合唱ではプロの歌手やオーケストラと共演させて

いただいたりと、学生時代からさまざまな貴重な経験ができました。その経験は今もとても役に立っています。

(妹)真紀さん 坂本先生には、メロディに日本語の歌詞をのせてただ歌うのではなく、「言葉を楽しむ、真の意味を伝える」ことの重要性も、手厚く教えていただきました。

童謡を歌っていく中でも、東京音楽大学で学んだ多くのことが生きています。

童謡は、日本人の誰もが必ず口にしたことがあると思います。私たちの歌がお客さまの心に届き、子どもたちが元気に楽しそうに一緒に歌ってくれて、ご年配の方々も昔を思い出し懐かしい!と涙を流し喜んでくださることが、活動を支える原動力になっています。

東京音楽大学文化力発信プロジェクト主催 羽田プロジェクト

2015年8月24日～29日

羽田空港国内線第2ターミナル5階フライトデッキトキョー
協力 日本空港ビルデング株式会社

「2020年、東京五輪での再会を目指して」…。
学生の意気込みに共感し、応援にあたられた広上淳一教授と、プロジェクトリーダーの前嶋修光さんに、お話をうかがいました。



広上淳一教授

他に先駆けたことを
誇りに思う

「何かを社会に発信したい」という、学生たちの前向きな気持ちを知り、私はそれを応援しようと思いましたが、結果的に、お客さまにはとても楽しんでいただけましたし、空港施設の方々にも、活気のある現場の様子を見ていただき、大いに評価していただきました。「今後は、成田空港や羽田空港の国際ターミナルでイベントを実施したら、さらに外国人の方々に興味をもって見てもらえるのでは」とまですべて言っていたことを、とてもうれしく思っています。ミラノやハンブルク、フランクフルト、アムステルダムなど、ヨーロッパの空港では、オーケストラの演奏こそ見たことはありますが、ピアノリサイタルなどは、頻りに開催されています。そうした、人が頻りに来ます

る公共の場で演奏することは、決してもめずらしいことではありません。むしろ、多種多様な人の気持ちに交差する場所で、東京音楽大学が他に先駆けて、オーケストラをはじめとしたコンサートを行い、皆さまから高い評価を得られたことを、私は誇りに思い、満足しています。

スタート時は苦難の連続

本プロジェクトは、決して最初から順風満帆でスタートしたわけではありません。本番までの時間が乏しい中、楽器の手配や練習スタジオの確保、練習時にメンバーがなかなか揃わないなど、当初は苦難の連続でした。しかし、前嶋君をはじめとした、プロジェクトチームのメンバーが頑張った結果、徐々に大学全体の協力も得られるようになり、一歩ずつ、そして着実に、いい方向に進んでいくようになりました。演奏面でも、ベートーヴェン、ロッシニの作品など、結構ハードな曲が多かったにも



かわらず、限られた練習時間の中でうまくまとめることができましたと思います。

学生たちの力を信じて

今回のこのプロジェクトの成功は、音楽を通じたメッセージの発信者として、東京音楽大学の社会的な存在意義の啓発と、認知の向上につながることで、自分ができることを自由に

やることでできて、うれしかった「企画・運営から企業への協力要請など、さまざまな仕事に関わることが、とても勉強になった」と言っています。

参加したのは、特待生やコンクールでの受賞歴がある学生ばかりではありません。将来、演奏家にならないかもしれない。しかし、私は、彼ら一人ひとりに大きな可能性があり、また完遂する能力があると信じていました。皆、それぞれのレベルで、一所懸命、必死に取り組んできたんです。

実は、私はこの結果を最初から予測していました。そして、練習していく過程で、その勝算は確信に変わりました。私が指揮をしたから成功したわけでは



なく、学生同士がお互いを心から信頼しあい、指導する教員とともに演奏したいと思ったからこそ、最高の結果が得られたのだと思います。そして、強い意志を抱く学生たちを教員が応援することで、これだけの演奏ができることを証明できたことに、私は大いなる喜びを感じています。

大学の使命

学生が、望むものに挑戦しやすい環境を用意することは、大学の使命です。教育を施すだけではなく、彼らが抱く夢やアイデアを、できるだけ思い通りに実現できるように、しっかりサポートしながら導いていくのが、大学が目指すべき本来の姿だと思います。

今回、コンサートの本番で、

お客さまの反応を直接感じ取れたことは、学生たちにとってかけがえのない大きな収穫でした。参加した学生たちには、この初めての試みが発現でき、成功したこと、誇りと自信をもっていたほしい。自分たちが頑張ったことは、決して間違っていないかと思ってしまう。

前嶋修光 プロジェクトリーダー

チーフ 大学院1年

私たち学生が、勉強したい、発信したいと願うことを、自由に挑戦させていただき、とてもいい経験になりました。時間のない中、演奏会で使用する楽器の申請に時間がかかったり、付属高等学校で練習させていただく交渉、オーケストラの練習が可能なスタジオを探し回ったりと、想定外の苦労も多くあり、また、予定以上に費用がかさんだため、企業に向いて、プロジェクトの主旨を説明、寄付を募るなど、苦労の連続でした。しかし、それを超越する喜びと、日頃の授業やレッスンとはまた違う、さまざまなことを学べたことに、今とても感謝しています。

東京音楽大学付属幼稚園 園長

加納里美 (音楽 教授)

東京音楽大学付属幼稚園では、「コンピュータで作られた音楽ではなく、『生の音』を聞かせること」とは、園児にとって、とてもいい影響を与える」と、という考えで日々指導しております。参加した年中、年長の園児32名は、日頃から歌、ピアノ、マリンバ、ヴァイオリンのレッスンを幼稚園内で受けており、今回のコンサートのために行った1時間半ずつ2回の練習で、曲のすべてをマスター。当日は、広上先生が指揮される、東京音楽大学の有志で結成された、迫力ある生のオーケストラの伴奏で、立派に歌ってくれました。多くの園児たちが、お客さまの前で歌うことを楽しんでいました。音大生との共演は、園児たちにとっても、とても貴重な経験になったと思います。



- 8月24日
「2020年での再会を目指して」オープニング
指揮：河上 隆介
ソリスト：今川 裕代(ピアノ) 高橋 淳(テノール)
見角 悠代(ソプラノ)
演奏：癒しの森おーけすとら(東京音楽大学学生による)
東京音楽大学付属幼稚園園児たち
- 8月25日
「祭」～地方で芽生え、育っていった芸能～
室内楽+獅子舞
- 8月26日
納涼音楽祭
三味線+室内楽
- 8月27日
オーケストラを作った男
室内楽
- 8月28日
未来のコンサート
室内楽
- 8月29日
「2020年での再会を目指して」エンディング
指揮：広上 淳一
ソリスト：今川 裕代(ピアノ) 高橋 淳(テノール)
萩原 みか(ソプラノ)
演奏：癒しの森おーけすとら(東京音楽大学学生による)
東京音楽大学付属幼稚園園児たち

作曲で学んだ「組み立て方」

河野 恵美

作曲「芸術音楽コース」 大学4年

[内定先]

新日鉄住金ソリューションズ株式会社



東京音楽大学への進学を望んだ理由は、現代の作曲の第一線で活躍されている憧れの先生がたくさんいらつしやり、そのもとでぜひ作曲を学びたいと思ったからでした。入学後、そうした先生方のレッスンでは、少数編成の曲から吹奏楽や管弦楽まで、私の意見を尊重しながらも別な発想からの作曲方法をアドヴァイスしていただきました。学長賞選考演奏会もとても貴重な体験でした。大編成の曲を書いたため多くの演奏者を集める必要が生じ、あらゆる人脈を使い走りまわりました。そんな多大な苦労があったからこそ、本番の演奏を聴いたときの感激

は忘れられません。演奏者たちの「楽しかった!」という言葉は今もはつきりと覚えています。自分が組み立てた曲を「音」で聴く喜びと、演奏する仲間たちの「気持ち」にも触れることができるのは、東京音楽大学ならではの環境だと思います。私がシステムエンジニアへの道を選んだのは、もともとITや電子機器に興味がありましたし、「仲間と共に社会のために何かを組み立てたい」と願ったからです。音楽を通じて学んだ「創作し構築する知識と経験」が、音楽とは直接関係はない分野でも評価・理解いただけたことをとてもうれしく思っています。

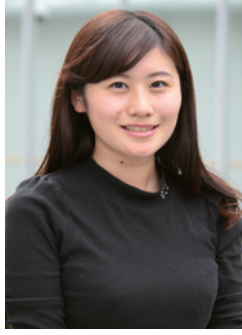
幅広い選択肢がある就職先

古川 彩

声楽専攻声楽演奏家コース 大学4年

[内定先]

三菱商事株式会社



声楽を習い始めたのは高校2年生の頃です。私立大学の付属高校に通っていたので、そのまま進学するのも選択肢のひとつでしたが、声楽に打ち込み音楽教員になろうと、東京音楽大学へ進みました。しかし、教職課程を履修し教育実習を経て、違う道を考えるようになりました。というのも、社会人経験のないままの私が、子どもたちを指導することに少し不安を感じたのです。そうした経緯があって、就職活動を開始。就職特訓講座も積極的に受講しました。三菱商事に就職が決まりましたが、多岐にわたる分野に携わる商社なら視野が広

がり、自分ももっと成長できると期待しています。また、もちろん社会人になってからも、音楽とはずっと関わっていききたいと思っています。東京音楽大学の学生には、社会に出ていく際、幅広い選択肢があります。演奏家、音楽教員、そして私のように一般企業に就職することもできる。加えて、夢をもつ周囲の人たちに刺激を受けながら4年間自分の演奏と向き合い、先生からの課題・具体的な目標に向かって毎日努力し続ける。その結果、簡単には挫折しない精神が作り上げられたと思いますし、社会人になる私の礎になると信じています。

打楽器

入学時の楽器に縛られず もつとも自分に合った 「打楽器」に出会う

Asushi Sugihara
菅原 淳 教授

初の「打楽器教員によるコンサート」

先日、念願だった「打楽器教員によるコンサート」を開催しました。マリンバのソロやデュオ、ティンパニのソロから、フルートの工藤重典先生をお迎えしたジョリヴェの『協奏的組曲』フルートと打楽器のための『や、打楽器教員全員で合奏したバーンスタインの『ウェスト・サイド物語』まで、バラエティ豊かな内容になったと思います。また、本番当日の工藤先生を交えたりハーサルが白熱した演奏だったことも、とても印象的でした。作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」から市原康先生もドラムとして参加いただきましたし、打楽器の重厚かつ繊細な音による魅力と楽しさを、十分お伝えすることができたのではないのでしょうか。

魅力的な打楽器の音とは

基本的には、誰が叩いても音

が出るのが打楽器。しかし、だからこそ「きれいな音」が大切です。「きれいな音」であれば、フォルティッシモでも決してうるさく感じません。打楽器奏者を目指す方には、ティンパニであれマリンバであれ、そこを追求してほしい。そして、まずは「きれいな音」がわかるようになってほしいと思います。幸い、本学の打楽器科の卒業生は「音がきれい」といわれることが多く、そのためか国内外のオーケストラ団員として数多く活躍しています。

東京音楽大学の打楽器科

本科では、入学後に受験時の楽器の種類には縛られません。たとえば1・2年次には太鼓とマリンバの両方のレッスンが必修で、幅広く打楽器の演奏を学びます。ですから小太鼓で入学したにもかかわらず、入学してからマリンバに魅了されるようになり、卒業後にはマリンバ奏者として各種コンクールに入賞することも多々あるんです。

大学1年次からの管弦楽や吹奏楽の授業では、専門を決めずに一人がいろいろな種類の打楽器を担当します。4年間の勉強を通じて、自分が本当に好きな打楽器と出会う可能性があるので、東京音楽大学の打楽器科の大きな特徴だと思います。また、そこでアンサンブルの重要性を学ぶことも、貴重な経験でしょう。

積極的に「いい音」に接せよ

打楽器奏者を目指す人には、小太鼓であれば「2つ打ち」、マリンバなら「スケール」といった基礎技術の習得はもちろん、加えて、常に指導者や仲間の音によく耳を傾けてほしいと思います。また、打楽器だけでなく、オーケストラやオペラまで幅広く「いい音」に日頃から接し、それらを打楽器ならどう演奏するのか? そんな意識も重要でしょう。

東京音楽大学にはピアノや弦楽器、管楽器、そして声楽など、さまざまな演奏領域に多くの優秀な学生がいます。彼らからも刺激を受け、打楽器の可能性を探求し、挑戦していただきたいと願っています。



〈2015年度〉4年生の就職内定企業一覧

三菱商事株式会社	1名	シダックス株式会社	1名
三井住友銀行株式会社	5名	株式会社ランティス	1名
株式会社ジャパンネット銀行	1名	ヤマハ音楽振興会	1名
SMBC日興証券株式会社	1名	株式会社厚木楽器	1名
三井住友海上火災保険株式会社	1名	島村楽器株式会社	1名
日本航空株式会社	1名	株式会社こうゆう	1名
東日本旅客鉄道株式会社	1名	一般社団法人 相続支援機構	1名
戸田建設株式会社	1名	株式会社ワールドストアパートナーズ	1名
住友不動産販売株式会社	1名	株式会社丸八真綿販売	1名
新日鉄住金ソリューションズ株式会社	1名	大阪府警察	1名
株式会社ストーンシステム	1名	他多数	
株式会社クロノス	1名		
日東金属工業株式会社	1名		

(2015年11月末現在)

第70回ジュネーブ国際音楽コンクール 作曲部門 優勝

藪田 翔一 Shoichi Yabuta

2009年大学卒業 作曲「芸術音楽コース」、2011年大学院修了 作曲指揮専攻作曲研究領域



写真提供：共同通信社

今でも綿々と 根底に流れる 先生方からの 教え

弦楽四重奏曲の 集大成として臨む

私の作曲へのアプローチとダンスは、西村朗先生の背中から学んだものが礎になっています。今回のコンクールの課題は弦楽四重奏曲でした。私は常々、西村先生は弦楽四重奏に対して大きな思いがあるという印象をもっていたため、必然的に私も、弦楽四重奏に対して他の編成とは違う、ある種の特別な思いを抱いていました。そして、実はコンクールの応募締め切りの前、3か月間ほどスランプのよくな状況でしたので、「思い切つて弦楽四重奏の作曲の集大成と

して挑戦してみよう」と決心し、今回の受賞曲『Birllow』を作曲したんです。「Birllow」とは「うねり」を意味します。前作の『Edge』までは、「音の直線を積み上げていく」イメージの作りをしてきましたが、今回は「音の線を動かしながらうねっていく」様をモチーフに表現しています。日頃、作曲していく過程ではオーディエンスの期待と要求を意識して曲を作っていますが、今回は特に、これまで発表してきた曲と似たニュアンスをもたないようすることに、もっとも気を遣いました。私の場合、通常、弦楽四重奏の作曲には数か月を要していましたが、今回の創作期間は約1か月。きわめて短期間で苦労しましたが、集中して作曲に励みました。そして、知らぬ間にスランプは通り過ぎ、また作曲を楽しむようになった私がありました。

先生の言葉がなかったら：

今回のコンクールでは、現地到着後、私の作品を演奏してくれるメンバーと、とことん話し合う場をもちました。それは、梶場富美子先生から、「チャン

スを逃がさないよう、あらゆる面で事前に万全を期すように」というアドバイスをいただいたので、演奏会でも、演奏者の曲への理解と感じ方は、とても重要な要素です。普段は遠慮して言えないようなことも、今回は積極的に彼らとコミュニケーションを図り、リクエストを出しました。そうした場面で言葉は重要です。幸い演奏メンバーの中に日本人の方がいらつしやり、曲のイメージの細かなニュアンスを伝えていただきました。これら事前の準備も、今回の結果を生み出したと思っています。

私にとって、コンクールは作曲という勉強の、ごく一部に過ぎません。また、現代音楽は興味の対象のひとつという位置づけです。いろいろなジャンルの音楽に興味があり、これからは歌曲や映像音楽も作っていきたいと考えています。

そして、いつになっても東京音楽大学で学んだこと、先生方の言葉は私の中で生き続けているでしょう。

コハーン・イシュトヴァーン István Kohán

日本人に学んだ音楽への接し方

東京音楽大学による研^{けん}磨^ま

父がクラリネット奏者、母がフルート奏者という音楽一家に生まれ、8歳からクラリネットを始めました。その後、母国ハンガリーで活動していましたが、より音楽の可能性を広げるために、2014年から本学大学院で学び始めました。

毎回のレッスンでは、四戸世紀先生をはじめとした指導者の方々の、学生一人ひとりに合わせた指導で、「原石を磨き上げて」いただいています。今回それが実を結び、とてもうれしく感じています。

ミスを恐れず演奏する

ハンガリーでは、首都ブダペストの全23区にそれぞれ国立音楽学校があり、音楽教育はとても充実しています。来日以来、日本人の「勤勉さ」や「努力」「他人への敬意」に深く影響を受け、日々の音楽に対する私の接し方も変化したと思います。一方、日本人はとかく控えめ



写真提供：毎日新聞社

で、演奏時に「ミスをしたくない」という気持ちが強いように思います。ひとたびステージに上がったら、まったく別の人間になりきり、ミスを恐れず、感じるままに演奏表現することに、もつと挑戦されるといいのかもしれない。音楽の道はとてめも険しいものですが、音楽と向かい合う中で新たな発見、心身ともに揺さぶられるような、何ものにも代えがたい充実感を、私は今後も求めていきたいと思っています。

Profile クラリネット 大学院2年

2013年ハンガリー国立リスト音楽院(大学)卒業。在学中、国内外計15のコンクールで優勝・入賞する快挙を成し遂げる。第84回日本音楽コンクールクラリネット部門第1位、及びE.ナカミチ賞、岩谷賞(聴衆賞)他多数受賞。現在、特別特待奨学生として東京音楽大学大学院音楽研究科修士課程器楽専攻管打楽器研究領域2年在学中。

勝山大輔 Daisuke Katsuyama

生き生きと、そして堂々と

教員志望から演奏家へ

クラリネットとは中学1年のときに初めて出会い、高校を含めて6年間吹奏楽部で演奏していました。そして、将来は吹奏楽を指導する教員になりたいと考えて、本学に入学。入学後は、教職課程の履修とともに、クラリネットの勉強も精力的に続けていました。演奏面がすっかりとしたいなければ、優れた指導者にはなれないと思ったからです。転機が訪れたのは大学4年生のとき。プロのオーケストラで演奏する機会があり、楽団員の方々の、まさに「演奏家の音」に触発されて、自分もプロの演奏家になろうと決心しました。

結果につながった大学時代

3年前は2位にとどまった日本音楽コンクールですが、その後もし所懸命に練習に励みできた結果、今回優勝することができました。それもひとえに、東京音楽大学時代に学び、得たことが大きかったと思います。そ

こには、意欲にあふれ、レベルの高い管楽器専攻の学生が多く、刺激的な日々を送ることができましたし、ご指導いただいた、在学当時の恩師、浜中浩一先生(故)の、「生き生きと、堂々と演奏しなさい」という言葉は、今回のコンクールで演奏した際にも、私の心の支えとなっていました。これから入学される皆さんにも、ぜひ本学で、そうした言葉と出会っていただき、大きな夢に向かって進んでほしいと思います。



写真提供：毎日新聞社

Profile クラリネット 2008年大学卒業

13歳よりクラリネットを始める。世田谷学園高等学校を経て東京音楽大学卒業。在学中、ソロ・室内楽定期演奏会出演。第84回日本音楽コンクールクラリネット部門第1位入賞。これまでにクラリネットを日向秀司、浜中浩一、亀井良信、加藤明久の各氏に師事。東京佼成ウインドオーケストラを経て、現在東京都交響楽団クラリネット奏者。国立音楽大学非常勤講師。

多くの在学学生、卒業生がコンクールで受賞しました。その一部をご紹介します。

最新情報は、随時ホームページに掲載しています (http://www.tokyo-ondai.ac.jp/about/2015Competitions.html)

- 第84回日本音楽コンクール クラリネット部門第1位・岩谷賞
- 第26回日本木管コンクール クラリネット部門第1位・コスモス賞
- 第4回秋吉台音楽コンクール クラリネット部門第1位・山口県知事賞

- 第84回日本音楽コンクール クラリネット部門第1位

第69回全日本学生音楽コンクール 声楽部門 大学の部 第1位・横浜市民賞

水野 友貴 Yuki Mizuno

私を成長させた、先生方の言葉

私は、釜洞祐子先生の声に憧れて本学に入学しました。

スランプを乗り越え、再挑戦して1位に

全日本学生音楽コンクールには、昨年初めて挑戦しましたが、東京本選で落選。実力不足を痛感しました。その際、審査員の先生から「恩師の色に染まることはまずは大事なこと、しかし、これからは自分の色を打ち出すように」と、講評とともにアドヴァイスをいただき、「自分の歌」というものがわからなくなり、数ヶ月間、思うように歌えなくなっていました。そんなとき、島田準子先生から、「辛い経験なくしていい歌は歌えない。一人で頑張らないで！皆いるから」という言葉をいただき、忘れかけていた私の強みや魅力を再認識させてくださいました。今回歌ったのは、大好きなハムレットの『オフィーリアの狂乱』のアリア。今年こそ全国大会でこの曲を歌うことを目標に、先生方からのご指導と言葉



写真提供：毎日新聞社

を胸に刻み、歌に向き合った結果、念願の1位になりました。

恩師の教えを信じ、大きく成長する

今後、本学で歌を学ぶ方々には、「上手になりたい」という初心を見失わず、目の前の課題に精一杯取り組んでいただきたいと思えます。本学の先生方には、高いレベルからご指導いただけます。その教えと自分を信じ、努力し続けられ、誰もが必ずや成長できるはずですよ。



写真提供：毎日新聞社
同コンクールにおいて、声楽演奏家コース4年 岩美 陽大さんが3位に入賞

Profile

2014年声楽演奏家コース卒業 大学院2年 声楽専攻オペラ研究領域
2014年大学主催卒業演奏会、第84回 読売新人演奏会出演。2015年 第69回 全日本学生音楽コンクール 大学の部 全国大会第1位、並びに横浜市民賞(聴衆賞)受賞。大学院オペラでは「夕鶴」つう役、「フィガロの結婚」スザンナ役で出演。釜洞祐子、島田準子、小森輝彦、服部容子の各氏に師事。

森川 元気 Genki Morikawa

今も、心の中で恩師に問いかける

**有意義な意見を
得られる環境**

現在の私がプロフェッショナルとして演奏活動を行うことができているのは、東京音楽大学で学んだからこそです。

もともと私は、テナートロンボーンを専攻として入学しましたが、残念ながら、4年生になっても演奏家としての芽はまったく出ませんでした。そんな中、先輩からバストロンボーンへの転向を勧められたことがきっかけで、大学卒業の3か月前からバストロンボーンを演奏するようになりました。現在のポジション、タイトルを獲得できたのは転向後のことでした。

そして、卒業した今、駆け出しの私は、「先生だったら、ここはどうやって吹くだろう」と自分に問いかけながら演奏する日々を送っています。新田幹男先生には、正しい奏法から、音楽、心構えに至るまで、プロフェッショナルの演奏家として必要なすべてを教えていただきました。



写真提供：株式会社フォトライフ

もしもこれらの出会いがなかったら、今、私は音楽を続けられていなかったかもしれません。音楽大学に入学する人は、自分がやりたい明確なビジョンをもっていることが多いでしょう。しかし、果たしてそれが本当に自分に向いているかどうかはわからないもの。他人だからこそ見出ししてくれる、もっと別の適性があるかもしれません。客観的な意見を率直に与えてくれる、恩師、先輩、仲間といった環境が東京音楽大学にはあります。

Profile

トロンボーン 2013年大学卒業
1990年、石川県生まれ。21歳よりバストロンボーンを始める。東京音楽大学卒業。オーケストラプレイヤーとしてのみならず、ソリスト、クリニシャン、スタジオミュージシャンとしても国内外で活躍中。現在、中部フィルハーモニー交響楽団バストロンボーン奏者、石川トロンボーンファミリーメンバー。小泉 伸、新田幹男の各氏に師事。

日本管打楽器コンクール

トロンボーン部門 第1位・特別大賞・東京都知事賞・
文部科学大臣賞・内閣総理大臣賞

第39回ピティナ・ピアノコンペティション 特級グランプリ

文部科学大臣賞・東京シティ・フィル賞・読売新聞社賞

篠永 紗也子 Sayako Shinonaga

感謝の気持ちをもって演奏する

リベンジを誓った昨年

私が東京音楽大学を進学先に選んだのは、素晴らしい先生方、卒業生がたくさんいらしたからです。現在、鷺見加寿子先生と鈴木弘尚先生のお二人からご指導いただいています。

昨年のピティナ・ピアノコンペティションでは2次予選は通過できましたが、セミファイナルで自分の音を表現するレベルには至らず、ファイナルには進めませんでした。それでリベンジを誓って今年も参加しました。一人で練習をしていると、本当



写真提供：全日本ピアノ指導者協会

Profile

ピアノ演奏家コース 大学4年
第17回金沢フレッシュコンサート2014オーディショングランプリ、第1回イモラ国際ピアノオーディション2014 in JAPAN大学・一般の部第1位など国内のコンクールに多数入賞。2015年、第39回ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリ、併せて文部科学大臣賞、東京シティ・フィル賞、読売新聞社賞を受賞。これまでに、石井理恵、鈴木弘尚、鷺見加寿子の各氏に師事。

に苦しいときがあります。でも、「日頃の努力の成果を聴いてくださる人たちがいる。本当にありがたい！」、そうした感謝の気持ちをもてたからこそ、今回の本番ではよい演奏ができたと思っています。これから進学されるかたには、「お互いのよさを認め合い、取り入れていく」、本学ならではの自由で温かい環境で音楽を学んでほしいと思います。

私も今後はもっとレパートリーを増やし、「またあの人の演奏を聴きたいね」と言ってもらえるような、そういう演奏家を目指して努力していくつもりです。

福田 麻子 Asako Fukuda

成長に不可欠なコンクール

日頃の努力と準備が必要

コンクール期間中、ドイツに2週間滞在。充実した時間を過ごすことができました。後日、ファイナル時の演奏を映像で見るとき、弾くのが精一杯と感じるほどで、「体力があればもっといい演奏ができた」と痛感し、海外で演奏する際の体力保持の重要性に、気づきました。

ハプニングでセミファイナルで予定の30分前に呼び出され、会場到着後すぐに演奏することになり、さらに、ファイナルでは演奏直前に弦が切れてしまう

ありさま。そうしたことにも対処でき、何とか最後まで演奏を行うことができました。本来、音楽は楽しむもの。コンクールを楽しむためにも、ハプニングに打ち勝つためにも、日頃の努力と準備が必要だと思います。

音楽と真摯に向き合う
先生からは、演奏のことはもちろん、雰囲気作りも大事だとアドヴァイスいただきました。コンクールは、自分と向き合うことができる、貴重な機会です。自分が成長していくためには、コンクールは不可欠なものです。



Profile

ヴァイオリン 大学1年
第18回日本クラシック音楽コンクール全国大会第3位。第63回全日本学生音楽コンクール全国大会入選。第63回全日本学生音楽コンクール全国大会第3位。第16回クロススター・シェーンタール国際ヴァイオリンコンクール第3エイジグループ第2位・パッサ賞。小栗まち絵、原田幸一郎の両氏に師事。特別特待奨学生。

第16回クロススター・シェーンタール 国際ヴァイオリンコンクール

第3エイジグループ第2位・パッサ賞



写真提供：新潮社

第一線で活躍する、先生方の働きぶりから、数多くのことを学んだ

湯本 香樹実さん
Kazumi Yumoto

小説家
作曲 1999年大学卒業

一歩進んだ音楽大学
身近に常に音楽があったため、中学生の頃からモノ作りに関心があった私は、自然な流れで「作曲してみよう」と思うようになりまして。レッスンを本格的に始めたのは高校生になっ

てから。三枝成彰先生に指導していただくようになり、それが縁で東京音楽大学の作曲専攻に進学したんです。入学して思ったことは、とにかく自由で、先進的な大学だということでした。卒業後、演奏家や作曲家だけではなく、音楽教員や一般企業まで、音楽を通じてさまざまなジャンルの世界で自分を表現する先輩たちが数多くいらっしゃり、創造的に生きることの素晴らしさを肌で感じました。在学中は、実に数多くの貴重な経験をさせていただきました。当時の私は、よく、自分の声や楽器の音を音源として作曲し、多重録音していましたが、その曲をモダンバレエで使ってもらったこともありまして、当時在職されていた湯浅譲二先生のゼミでは、60・70年代初期のラジオドラマをたくさん聴かせていただき、音だけの世界で物語を表現することの面白さも知りまして。卒業制作の際には自分で台本を書き、オペレッタの作品を作りました。それを三枝先生が見てくださり、「文章も仕事にしてみたら？」とおっしゃったんです。当時、音楽を職業とすることに、深く悩んでいた私の背中を、三枝先生のその言葉が、文章の世界へと進むべく押しつけてくださいました。今思えば、学生時代に一人で部屋にこもって曲を作っていたことと、現在、机に向かってこつこつ物語を作

り上げていく作業は、私にとっで違和感なく繋がっています。音楽と言葉、どちらか一方が欠けてしまったら、自分の創作活動は成り立ちません。
大学時代に学んだ「時間」の意味
大学時代、私は音楽から二つの大きなことを学びました。一つは「完成させることの大切さ」です。在学中、毎週のレッスンでは、たとえ終わっていないくとも、必ず翌週には課題を提出し、その積み重ねで、曲を完成させなければなりません。そうして、あきらめず、最後までやり遂げる大切さを、私は大学時代にしっかりと教えていただきました。それは、言葉をつかって表現する、今の私の中でも生きています。
そして二つ目は「時間の流れ」です。音楽は一時的に中断して、またそこから聴き始めるものはありません。私は、「始まったものは、必ずある場所にたどり着き、自然に終わりを迎える」という、時間の連続的な流れ、「時間芸術」とでもいう概念を、音楽から学びました。もちろん小説の場合は、何度も中断されながら完結されますが、そうした時間の流れとその意味を意識して、これからも作品を作り続けたいと思っています。
できることは必ず見つかる
今振り返って、この大学で学

んで本当によかったと感じることは、第一線で活躍する先生方の仕事ぶりを間近で見て、触れて、感じる事ができたということです。音楽芸術を表現するには、そこに人間の魂がこもっていないければ、その作品に価値はありません。全身で感じ、考え、生み出していく芸術家の方々——三枝先生や湯浅先生といった、素晴らしい先生たちの仕事ぶりに触れたことは、私にとって、ほかに代えがたい貴重な経験であり、一生の財産です。そして私が今実感しているのは、人には必ずその人であることができないことがあるということ。たとえすぐにはそれがわからなくとも、今日の自分が求めること、できることは何なのかをよく考え、実践していけば、それは彼方にある目標と結びつくものです。人間は小さな選択の積み重ねで生きているのですから。自分の可能性を信じ、できることをじっくりと探してほしいと思います。

Profile

作家。デビュー作「夏の庭——The Friends」で日本児童文学者協会新人賞、児童文芸新人賞を受賞。同作は映画化・舞台化されるとともに世界十か国以上で翻訳され、米・パチエルダ一賞、ボストン・グローブ・ホーン・ブック賞等を受賞した。絵本「くまとやまねこ」（酒井駒子画）で講談社出版文化賞絵本賞を受賞。他の著書に「西日の町」「夜の木のうで」等。2015年秋、小説「ボラの秋」と「岸辺の旅」が映画化、公開された。

音楽が好きなら迷わず飛び込んでほしい

櫻井 亜木子さん
Akiho Sakurai

鶴田流 薩摩琵琶奏者
音楽教育 1999年大学卒業

私は、小学校に入学してからピアノを習い始め、中学2年のときに一度はピアノをやめてしまいました。高校2年のときに、やはり音楽大学に入りたいと思い、縁あって東京音楽大学の音楽教育専攻に進学しました。

偶然巡り合った薩摩琵琶との縁

入学後、大学で和楽器を学べることを知った私は、ぜひ「箏」を習いたいと思いました。自分では希望の楽器欄に「箏」と書いたつもりでしたが、初回ガイダンスに私が飛び込んだ部屋は、



なぜか「琵琶」の教室だったんです。そこで、田中之雄先生の満面の笑みに迎えられ、「箏を申し込んだ」とはとても言い出せず、そのまま薩摩琵琶を習うことになりました。

そんな経緯もあり、当初は熱心に稽古する学生ではなかったのですが、歌入りの曲を習う段になり、ある日、田中先生が琵琶の名曲「敦盛」をお手本に弾いてくださったのです。それを目の前で聴いているうちに、自然と目に涙があふれてきました。薩摩琵琶の独特の間の取り方に、ノックアウトされたんです。以来、私は琵琶にのめり込んでいきました。

「日光観光大使」「文化庁文化交流使」に

卒業後は、NHKの邦楽技能者養成コースに進むことになり

ました。そして、卒業前に友人と旅行で訪れたのが、栃木県の湯西川温泉です。現地に行つて驚いたことに、そこは、平家落人の里でした。薩摩琵琶には、亡くなった武士を鎮魂する曲——りわけ平家にまつわる曲が多いのです。そこにも私は縁を感じます。その旅行がきっかけとなり、卒業して間もない6月に、「湯西川・平家落人大祭」で演奏する機会に恵まれ、私はその地に10年以上足しげく通いながら、いろいろな旅館や施設で積極的に演奏させていただきました。そうした活動を評価していただいた結果、「日光観光大使」に任命していただいたのです。その後、「文化庁文化交流使」にも任命され、ブラジルを皮切りに世界7か国15都市を訪問。延べ約1万人の人々に日本の文化をお届けしました。

琵琶を学べるのは東京音楽大学だけ

和楽器、特に琵琶を本格的に、しかも個人レッスンで学べる大学は、東京音楽大学だけです。特に、将来子どもたちに音楽を教える方には、ぜひ箏や尺八などの和楽器も習っていただきたいです。2020年の東京五輪に向けて、海外の日本文化への関心も高まっていく中、日本人にはもっと和楽器のことを知ってほしいです。



スイスルガーバにて

卒業生インタビュー

東京音楽大学が新しいステージへの挑戦をスタートした今、付属高校も大きく生まれ変わります。

2019年、大学の新しいキャンパス開設に伴い、付属高校のキャンパスは池袋に移転。高大一貫教育をさらに進めていきます。東京音楽大学は、付属高校からの飛び入学制度の導入を検討しており、大学の早期卒業制度と併せ、高5年で終了することも可能になり、また、高校生のうちから大学の単位取得ができるようになります。

学校長 野本 正平

生徒たちの声： 付属高等学校の魅力とは？

2015年12月1日

〈参加者〉 岡村雄之典(ピアノ/創作コース1年・六戸 繪香(ピアノ/創作コース1年・佐藤実樹(チエロ2年) 高木文華(声楽2年) 堀尾泉水(声楽2年) 金子大葉(チエロ3年) 小林加奈(オーボエ3年) 谷口隼輔(クラリネット3年) 梨本 彩夏(ピアノ/演奏家コース3年)



付属高等学校ユニセフ・チャリティーコンサート
2015年12月3日 東京芸術劇場コンサートホール
ラフマニノフ/バガニーニの主題による狂詩曲 Op.43 他
指揮：三原 明人 ピアノ：藤田 真央 他

付属高等学校の生徒たちが集まっているとき、入学の経緯や学校生活のこと、将来の夢を語ってもらいました。その要点は：

文化祭や講習会で、高校生活を体験

本校を選ぶ際には、パンフレット等で各校を比較するのはもちろん、文化祭や講習会で実際にキャンパスの雰囲気や味わっています。そこでレッスンを受けた先生に学ぼうと入学を決めた生徒もおり、「本格的にオペラが学べる」「ピアノも作曲も学べる」という、具体的なカリキュラムに魅力を感じて入学した生徒もいます。

音楽という共通の目標をもつ仲間

多くの生徒が「中学では友達と音楽の話が通じなかったが、ここでは存分に会話できる」と感じ、自分の周りが、音楽という共通の目標をもって全国から集まった生徒たちばかりだということに驚き、刺激を受けています。ま、強いているが、将来、作曲と指揮の活動をしていくことが目標」「オーケストラ志望だが、自分の演奏で誰かを勇気づけられれば」と、一人ひとりが熱い思いを抱いています。

楽しい文化祭、充実感・達成感が得られるチャリティーコンサート

その他、学校生活については、「クラ

ゝた、「皆が音楽と真剣に取り組んでいるから、悩みを共有でき、相談相手になってもらえる」という声も。

大学同様のレベルの高い指導に満足

付属高等学校の特徴として、大学生や大学院生、先生との関係が密接で、目上の人との接し方、言葉づかいや礼儀作法などが自然に身につくと思っっている生徒も多く、大学と同様の高いレベルの授業や、音楽療法など、カリキュラムが豊富で幅広く音楽を学べることに、満足度が高いことがうかがえます。

親切で話しやすい先生方

先生に対しては「ときには親のように接してください」と感じ、指導内容に関しては、「オペラで自分や言葉の表現方法を学んだ」「心で歌うことの大切さを知った」「曲の解釈の仕方を学んだ」「自分で考える習慣と力を育ててくれた」と、さまざまな回答が。共通していることは、どの先生も親切で話しやすい、音楽以外のことも幅広く指導してくれるという感想です。

一人ひとりに明確な将来の夢

将来の夢は実に多彩。「ミュージカルの舞台に立つことが夢。オペラの授業でいろいろな表現方法を学び、将来役立つと思う」「現役で活躍しながら学校で指導している、そんな先生のようにになりたい」「今まで自分が感動した音楽や、自然と涙が出るような演奏がしたい」「ジャンルにこだわらず、いろいろな人とアンサンブルしたい」「先生になり、チエロの魅力を伝えたい」「語学力を生かし、海外の子どもたちに音楽の楽しさを伝えたい」「ピアノと作曲を勉強することに演奏喫茶を出店した文化祭では、専門以外の楽器を演奏したことが楽しかった」「準備期間はとも忙しかったが、充実したい経験になった」「東京芸術劇場で行うチャリティーコンサートは、授業でやってきたことの集大成として、毎年達成感が得られる」などの声が聞けました。

辻彩奈

Ayana Tsuji

ヴァイオリン

付属高等学校3年



ヨーロッパ訪問をはじめ、初めての経験が多いコンクールでした。その一つが、モーツァルトのコンチェルトでの「弾き振り」。温かく迎えていただいたオーケストラとのアンサンブルが心地よく、コンクールとはいえ、とても楽しめました。ファイナルを含め5回ステージに立ちましたが、すべて悔いなく演奏ができたのが良かったです。

翌日のガラコンサートでは聴衆賞をいただき、お客さまに評価していただ

いたことも、大きな自信につながりました。また、セミファイナルの課題曲としてコンクールのために作曲された新曲を暗譜で演奏し、新曲特別賞もいただきました。ガラコンサートでその曲を演奏する前に、作曲されたご本人にアドヴァイスを受け、作曲の意図を直接伺えたことが、とても勉強になりました。これからの挑戦者の気持ちをお忘れず、自分を高めていきたいと思

Profile

第9回大阪国際音楽コンクール第1位。第63回全日本学生音楽コンクール小学校の部全国大会第1位。第82回日本音楽コンクール第2位。第11回ソウル国際音楽コンクール第2位(最高位)。第9回ハノーファー国際ヴァイオリンコンクール第5位入賞、聴衆賞及び新曲特別賞を受賞。これまでに、名古屋フィル、神奈川フィル、大阪響、東京シティフィル、チェコフィルハーマニー室内合奏団、Sejong Soloistsなどと共演。2015年度ロームミュージックファンデーション奨学生。現在東京音楽大学付属高等学校に特別特待奨学生として在学中。これまでに、小林健次、矢口十詩子、中澤きみ子、小栗まち絵、原田幸一郎の各氏に師事。NPO法人イエローエンジェルより名器賞与を受ける。

藤田真央

Mao Fujita

ピアノ演奏家コースエッセンス 付属高等学校2年



モーツァルトの曲は苦手でしたが、松山元先生から、ステップアップのために、モーツァルトもレパートリーにするよう指導され、このコンクールを受けました。中国での本選ファイナルでは、ウィーンの演奏家の方々と、コンチェルトを気持ちよく演奏できました。それは、苦手な曲に立ち向かい、克服したからだと思います。また、審査員のミシエル・ペロフ先生から、「音がきれいだ」と評価され、とてもうれ

Profile

第19回日本クラシック音楽コンクール全国大会グランプリ。世界クラシック2010(台湾)第1位。第64回全日本学生音楽コンクール小学校の部全国大会第1位。第5回ロザリオ・マルチアーノ国際ピアノコンクール(オーストリア/ウィーン)で日本人初の第1位。ズービン・メータ氏が名誉総裁を務める第1回若い音楽家のためのモーツァルト国際音楽コンクール(中国/珠海)GroupBで第1位。ショパン国際音楽祭(ポーランド)世界のアッシュ音楽祭(イタリア)パート・ラガツ次世代音楽祭(スイス)に招かれ出演。2013年11月ナクソス・ジャパンよりデビューアルバム「MAO FUJITA」2015年9月セカンドアルバム「ヤング・ヴィルトゥオーソ」をリリース。松山元氏に師事。

しかったです。ガラコンサートでは、初めて中国のお客さまの前で演奏しました。言葉はわかりませんが、心のこもった拍手をいただき、音楽は世界共通の言語、誰もが楽しめるものだ、あらためて感じました。今後は、さらに大きな国際コンクールでの受賞が夢です。そのためにも、次はベートーヴェンのハンマークラヴィーアなど、大作に挑戦したいと思

弦楽アンサンブル第25回演奏会

2015年10月24日 東京音楽大学100周年記念ホール
指導 山口裕之教授



ベートーヴェン／弦楽四重奏曲 第14番 嬰ハ短調 作品131 ベートーヴェン／大フーガ 変ロ長調 作品133
[アンコール]ベートーヴェン／弦楽四重奏曲 第16番 ヘ長調 作品135より 第3楽章

今年の弦楽アンサンブル・エンドレスでは、私は指揮者としてではなく、演奏する学生の中に入り、彼らと一緒に演奏するスタイルをとりました。それは、学生たちに、「指揮者の指示に頼ることなく、まわりの演奏者の音に最大限に意識を集中し、瞬時に自ら判断して、自分の音楽を表現できるように頑張ってほしい」という思いからの試みでした。学生たちは、その予測していなかった演奏スタイルに、当初は相当戸惑ったと思います。しかし、そこで求められる「内側からのアンサンブル」は、いわば「究極のアンサンブル」です。演奏者が自発的にアンサンブルを図って演奏する場合と、指揮者から「もっと音を大きく」などと指示されているのでは、音も全然違います。一度でも、そうしたアンサンブルを経験・共感すれば、将来大いに役立つに違いありません。どんなに偉大な指揮者がいる場合でも、本来、アンサンブルは、演奏者たちが内側から作り出すものです。この授業が面白いと感じた学生は、今後、大きく変わっていくと思います。私は、東京音楽大学の皆さんが、オーケストラやその他、いろいろなところで演奏する際に、最初に内側から動かす役割を担ってほしいと願っています。

今年演奏したベートーヴェンの「弦楽四重奏曲第14番」は、まるで絵巻のような曲です。7つもの楽章で、40分間、調弦もできないまま、全曲切れ目なしに演奏しなければなりません。どこまでできるか挑戦しました。また「大フーガ」は、3年前から1年生の授業で扱ってきた曲です。今の4年生は演奏したことがないわけですが、本学の学生たちなら、必ずこなせるものと確信していました。本番では、いい音が出ていると感じられる瞬間も多々あった反面、「もっとできたはずだ」というのも正直な感想です。学生たちも同じ気持ちでしょう。しかし、そうした気持ちも、彼らの次の音楽的向上のきっかけとなることを、私は切に願っています。(山口裕之)

出演した学生コメント

ベートーヴェンの後期の作品「大フーガ」は、とても難しい曲で、練習スタート当初は演奏するのに苦労しました。また、指揮者がいないことにもかなり戸惑いましたが、次第に周囲の音により集中できるようになり、演奏者同士が、自発的に合図を出し合えるようになりました。山口先生が隣にいらっしやるので、その弾き方や動きを間近に見ることができ、音を聴けたことも、たいへん勉強になりました。

東京音楽大学&京都市立芸術大学 交流演奏会 吹奏楽 Vol.2

2015年11月7日 東京音楽大学100周年記念ホール
指揮 外岡祥一郎(東京音楽大学准教授)
増井信貴(京都市立芸術大学教授)

音楽文化の創造と発展を目的とした、東京音楽大学と京都市立芸術大学の交流演奏会第2回が、11月7日(土)、東京音楽大学100周年記念ホールで開催されました。前半は、東京音楽大学シンフォニックウインドアンサンブルが、本学の外岡祥一郎准教授の指揮により、バーンズの『交響的序曲』他を演奏し、後半は、京都市立芸術大学シンフォニックウインドアンサンブルが同大学の増井信貴教授の指揮により、グレインジャーの『岸辺のモリー』他を演奏。最後は、増井信貴教授の指揮で両大学合同による、シヨスタコヴィチの『祝典序曲』が大迫力で演奏され、アンコール曲では会場全体に手拍子が沸き起こる盛り上がりとなりました。



増井 信貴



外岡 祥一郎



第14回東京音楽大学コンクール

東京音楽大学100周年記念ホール

弦楽器部門 第1位受賞

2015年11月18日



福田ひろみ ヴァイオリン4年
コンチエルト全楽章をピアノ伴奏で演奏するのは、体力的、精神的に大変でした。しかし、曲全体を見据え、最後まで弾き終えたことは、大きな自信につながりました。課題曲も多く、このコンクールの参加をためらう人もいますが、学外の先生方から、客観的な講評をいただけるので、参加することはとても有意義だと思います。

管打楽器部門 第1位受賞

2015年11月19日



石田湧次 打楽器2年
打楽器専攻はいわばファミリーです。今回もお互い応援しあい、共に頑張る気持ちで臨みました。予選では、課題曲の太鼓と自由曲のマリンバ、2種類の楽器演奏でアピール。本選は、マラカスの独奏曲を取り入れ、自分にしかできない表現を目指しました。来年はオランダで打楽器コンクールがあるので、ぜひ挑戦するつもりです。

ピアノ合宿

2015年8月31日〜9月3日 長野県上水内郡信濃町
参加人数/教員9名 学生64名

■上田 優衣 ピアノ 大学4年

昨年のピアノ合宿がとても有意義で、楽しかったため、今年もまた参加しました。普段とは違う先生から受けるレッスンは新鮮で、表現の選択肢が増えた気がします。レッスンも、きれいな自然を見ながら、リラクセスした気分を受けられることができました。また、学校ではお話しすることがなかった先生や、先輩後輩、これまで知らなかった学友とも自然に交流をもて、貴重な機会でした。

■渡邊 礼華 ピアノ演奏コース 大学2年

野島学長の公開レッスンを受講させていただきました。どうしても弾けない苦手なフレーズについて、「この音を意識すると目指している音になる」と、普段とは違う視点からアドヴァイスいただき、解決策が見えたのが大きな収穫でした。時間がゆったり流れ、自然を感じながらのレッスンには開放感があり、最終日の演奏会でも、肩の力が抜け、自分が弾きたいように身体が反応してくれました。



周防亮介 「第25回出光音楽賞」受賞

Ryosuke Suho ヴァイオリン 大学2年 特別特待奨学生

昨年度、本学2年の周防亮介さんが、「出光音楽賞」を受賞しました。同賞は、わが国の音楽文化向上の一助として、将来有望な若手、新進音楽家の活動を支援するもの。「題名のない音楽会」(テレビ朝日系列)の25周年を記念し、1990年に創設されました。9月8日には、その授賞式と「第25回出光音楽賞受賞者ガラコンサート」が東京オペラシティで開催され、秋山和慶氏の指揮による、東京シティ・フィルハーモニック管



弦楽団と、チャイコフスキのヴァイオリン協奏曲第1楽章を共演。その模様は、11月8日の「題名のない音楽会」で全国に放送されました。

短期留学

ザルツブルク・モーツァルテウム国際サマーアカデミー

■溝口茜 声楽オペラ 大学院2年

モーツァルテウム国際サマー・アカデミーでの体験は、自分を変える転機となりました。レッスンを重ねるうちに、それまでの頭で考えて歌うことから脱却でき、自由に、より自然に歌えるようになりました。アカデミーコンサート

の舞台に立つチャンスにも恵まれ、そこで楽しみながら歌った経験も、今、大きな糧となっています。終わってみると2週間の短期留学はあっという間でした。短期留学は、



事前に具体的な目的・目標をもち、積極的に先生方から吸収することを心がけて臨むと、より充実したものになると思います。